第四百三十八號目次

社告

◉本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◉十日發行の分は稍や簡易實際を專らにし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女界教界に對する吾黨多年の主義を發表するもの。

○單に十日發行の分のみを購求せんさ所望せらるゝものあらば其望に應ずべし。

女學雜誌定價表

前金	壹冊價金拾錢 一年前金金貳圓（無郵稅）
廣告料	一行一回（廿七字詰）前金十錢 同三回以上一割引 同六回以上二割引 但し不道德なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし
注文	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

◎雛の種類圖畧解

◎1●室町時代の雛◎2●土佐古代の雛◎3●薩摩の古製系雛◎4●古代吉野雛◎5●薩摩古製の紙雛◎6●姫瓜雛◉7●むつび雛◎8●讃州地方の秋雛◎9●琉球の雛◎10●八丈島雛◎11●薩摩紙雛◉12●小米雛◎13●葛子雛◎14●元祿頃雛祭の風◎15●享保頃雛祭の風◎16●雛使のふり◎

第四百三十七號目次

日本宗教界詳論の詳論

日本宗教

第二卷第九號

三月廿日發兌

定價一冊八錢　郵稅五厘　六冊前金四十八錢

發行所　麴町區下六番町六番地　日本宗教社

福羽子爵校閲　共益商社編

英照皇太后宮　奉悼の歌　附御傳記並哀の極

全壹册　定價金三錢五厘　郵稅三冊マデ金貳錢

百册以上一時ニ取纏メ御注文ハ相當御割引可仕候

本書ハ學校教育ノ修身科ノ料ニ資セン爲メ福羽子爵ノ校閲ヲ乞ヒ編纂セシモノナレバ御事歷ノ叙述ハ殊ニ簡明樂譜モ亦一々符號ヲ附セリ苟クモ普通教育ニ從事セラル、諸彥ハ必ズシモ一書ヲ左右ニセラルベク亦學校用賞品トシテモ最モ適良價ハ至廉ニシテ而カモ好尚ノ書冊ナリ乞フ陸續御愛讀ヲ賜ハランヿヲ

每月一回廿五日發行



定價　一冊金八錢郵稅金五厘半年分六册前金郵稅共五十錢●一年分仝上金壹圓

發賣元　東京市京橋區竹川町十三番地　共益商社書店　電話番號本局五百廿九番

前號所載

『雛まつり』圖解

4





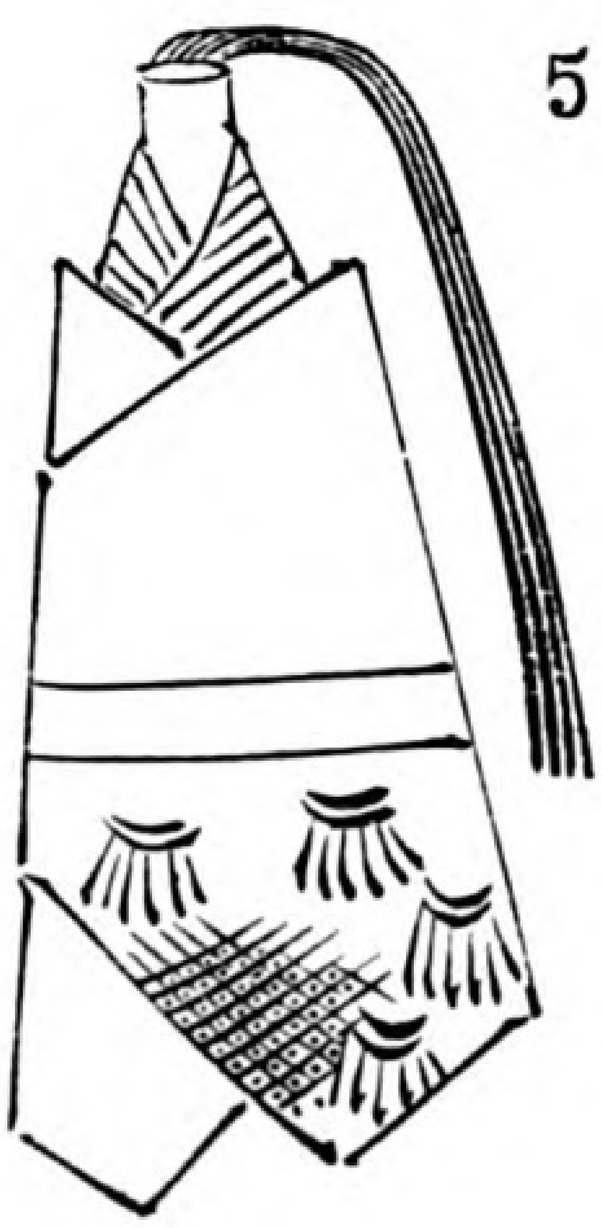
1



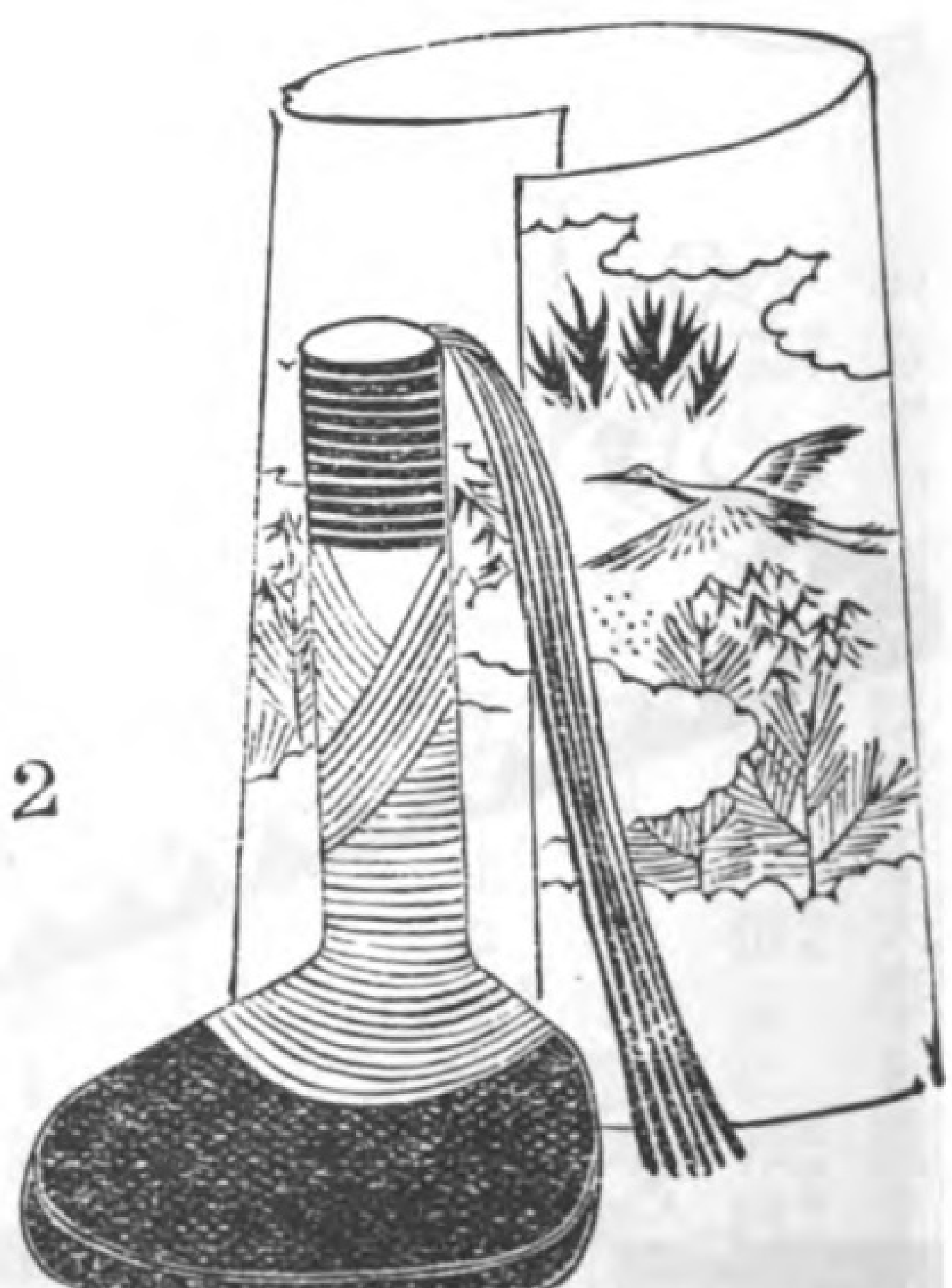
7



5



2



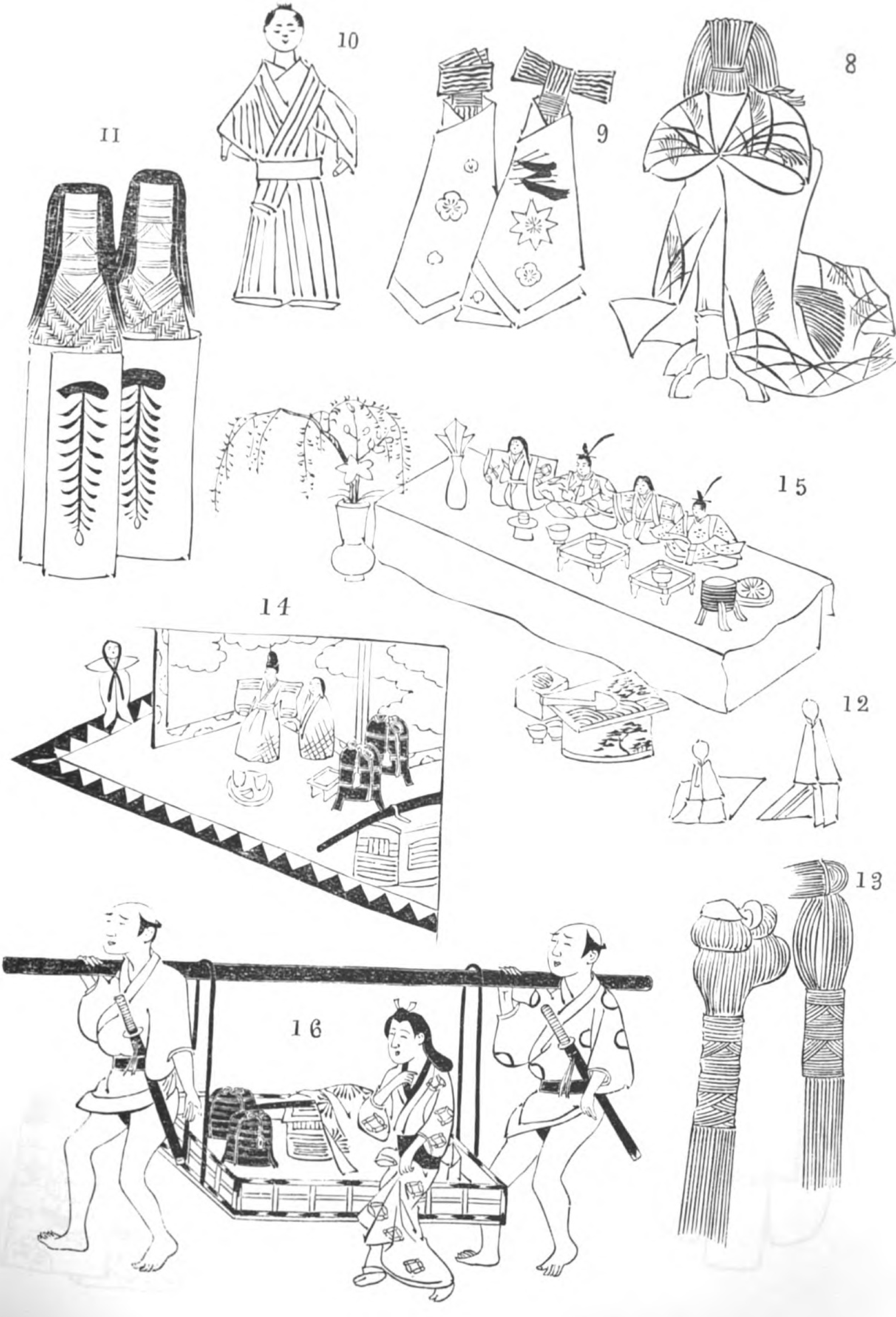


6



3




10
8
9
11
15
14
12
13
16

女學雜誌

明治三十年三月廿五日發兌

第四百三拾八號

社説

女子大學

夫れ、人を重んずるものは之を教育せざる可らず、之を教育するものは其の高きを冀はざる可らず。既に女性を敬重して之を優遇すべき所以を承知したる以上は、遂に女子の高等教育を要求すべきは必至の數なり。苟くも、女子の高等教育を要求するものは、當に女子大學を所望すべきこと勿論の結果にあらずや。

曾ては、帝國大學に女學生の入門を許可せしこともありき、而も後、何事かの情由ありて一時之を拒絶することとなりぬ。左れど、必至大勢の要求は、些かの故障をもて斥くることを得べからず、到底は女子大學を設立せざる可らずとの希望は陰々の裏に鬱起したり。惟ふに邦内幾多の女子教育家の思想には夙夜忘るること能はざりし念願ならん。既に東西五六の現存せる女學校は、皆な此の理想をもて拮据經營しつつありとは聞く也。

然し乍ら、公然、女子大學の名を宣言して、速かに其成立を企圖し、猛烈熱決の運動を試みつつあるは成瀨仁藏氏を以て嚆矢となす。氏は、大坂梅花女學校、及び新潟女學校の創立者兼教育者たり。後ち數年海外に渡行して親しく觀察する所あり、女學の爲に畢生を獻寄したる熱心家なり。今にして此人より女子大學設立希望の發表を聞くは、頗ぶる快心の事なりとす。

凡そ大事業の成る一日の故にあらず、之を遲くすれば怠敗し、之を急にすれば剝裂す。但だ夫れ痛熱の意志と玲瓏たる智慮とのあるありて能く徹底す。今や成瀨君が大學設立の計畫あること、事、勃率たるに似て實は然らず。其の女學に拮据せられしは既に十年に近かるべし。大學の計畫ありてより、既に一年有餘の經營を經たり。願くは、積力迸發し、精神貫徹して、

不日着々實地の成効あらんとを。凡そ成敗は他にあらずして我にあり。天下何等の反抗ありとも、遂に吾が赤誠に歸依せざるの理あらんや。成瀨君其他十數の發起人諸氏如にして、慨然重任し、堅確の意志、不抜の忍耐をもて遂行せば、何すれぞ事の成らざるとを憂へんや。則ち茲に其首途を祝し、其熱情を發すと云ふ。

最初の女子洋行第廿五年期

北海道開拓長官黒田清隆君、拓植に婦女子の大關係あるとを着目し、新日本に於て最初の女學校を起し、又亦、最初の女子洋行留學生を米國に派遣したり。其中、二女史は該地の女子大學を卒業し、亦是れ最初の女學士となられき、今の大山侯爵夫人捨松子、華族女學校教授津田梅子の二君これ也。而して瓜生繁子女史は音樂を專修し、是れも亦最初の洋樂專門家として、音樂の學者なるものゝあるものかと當年の世人に驚歎せられたり。茲に其の最初の洋行より起算して正に廿五年を經たり、米國シカゴの府民は爲に紀念會を催ふしたりと聞く。四年世紀夢の如く過ぎて、現時の女學界は歴然たる此の進運に會へり。今の女學者は多福なる哉。

孤女學院改稱、瀧の川學園慈善市

去年十一月本誌紙上に豫告せられたる孤女學院慈善市は、來四月一日以後四日間、上野公園内舊博覽會場第五號館に於て開かれんとす。惟ふに本誌の讀者は、孤女學院創立以來の知己たるべし、常に温かき同情を寄せて其の發達を希望せらるべきが故に、此の慈善市の爲にも應分の助力を寄せらるべきとを期望す。物品は當日迄、寄附金は來四月中に送附あらば、吾社、歡びて之を其の發起人に取次ぐべし。

宗教感は女性の粹なり

徒に宗派宗論の異同を辨ずるとを止めて、直ちに宗教感と云ふ、宗教的感情の本色を指ざさんとて也。夫れ、正義慈愛の神佛に一心を供奉し、不亂不動の信仰を捧げて堅固一向に崇拜するは、宗教心の中樞に非ずや。之よりして忝けなきに涙こぼるる感恩の情自から生じ、慈愛憐愛の心動きて物の哀

れに泣く優しき心掛も亦之より起る、眞とにこれ宗教感の本色なり。而して、この本色をもて婦女子の氣稟の絶頂となす。女子に宗教心なきは薔薇に香ひなきが如し。宗教感は即ち女性の粹にあらずや。

維新前の舊女學に於ては、家を護り、夫を奉ずるをもて一種の宗教となし、家名所天の二字は正に其の本尊の如くせられき。當時、婦女子が身を獻じて此の二つの理想を渇仰するの躰、宛ら禮拜の如かりし。其の宗敎的感情は之によりて滿足せられしなり。宜なる哉、貞烈無二の獻性自から發し、日東特殊の女德、朝日の如く、櫻の如く煥發せしをや。是れ此れ、舊女學の方法の宜しきを得たるが爲にはあらず、其の根底に於て宗敎的敎練の實際を存せしが爲め也。

今の舊女學を褒貶するもの、多くは双ながら誤まる。之を褒するものは、其の方法を可として、之を現時に施こさんとす、遂に其の根柢の精髓を看破せざる也。之を貶するものは、其の形式を不可として、直ちに其全躰を擯けんとす、未だ其の本來の特色を適用せざる也。夫れ、形は時代と同に隨つて變ぜざる可らずと雖ども、精神は万古不動のものたり。今の女學もし舊女學に於て其の精神となりしものの精髓を欠かば、亦能く遂に成功すること ある可らず、これ精神なきの死骨なれば也。たとひ、立憲平民の今の時代に於て、家名と所天との二題目を以て仰依渇仰の本尊となすこと能はずとも、此等を本尊として勢力ありしと同樣の勢力の別に代るものなくば、如何んぞ能く女性の覺悟を鍛錬せしめて其の不動の決心を定めしむることを得んや。

故に、舊女學の形に拘泥して止まんものは論ぜず、たゞ其の敎育の唯形に流るるが故に効力の久しからずして失せなんことを惜しむべき耳。之に反し、もし能く舊女學の精神を洞察して、其の根柢に學ばんとするものは、舊女學本來の面目たる其の宗敎的勢力の鬱勃たるに着眼し、此の秘義に學んで女學の粹を成就するの工夫あるべき筈なり。

蓋し女性の氣稟たる、集めざれば散るなり。其の未だ決着せざるや、漂々として浮草の如し、既に決着せば、堅きは鐵石の如し。古人、或ひは女氣の浮薄を言ひ、又々、女氣の堅固を言ひ、其論矛盾するに似たるものあるは、即はち此の兩面を言へるが爲め耳。西洋人の諺に、女は弱し、左れど母は

強しと言ふもの亦此邊の消息をもらす。

左れば、女性の粹を養ひて其宗教感を滿足せしめ、多情多血の感覺を一束して、一信不動の見地に決着せしめば、女性ほど、守りの固く、操の動かざるものはあらじ。之を女子教育の一秘決とす。女學の手段此に到らざれば、遂に堅固なる女德を養成するとは難し。

惜しい哉、或者は、舊女學を尊重しながら、舊女學の本色を知らず。或者は、宗教を採用し乍ら、亦た宗教感の迷信を養なひつつあり。過と不及と、其の誤まるとは一なり。味噌の味噌臭きは良き味噌にあらず、念佛三昧をかけ、宗教の上乘とは言はんや。抑も、宗教の生粹を女性の根柢に涵養し、僧にもあらず俗にもあらぬ自由無碍の境に、不思議の靈能を開發し、確乎たる信念と、高潔なる理想と、無我無想の獻性を附與して、以て能く女性の根本を固むるをこそ、新女學の希望とは言はめ。想ひ見よ、人情は古今一なり、發現は適時顯なる。如何なる研究觀察にも、靈をもて靈に直覺し、直ちに其精神を酌量せずして、奈何んぞ、能く其の樞要に中らんや。我舊女學と外國の新女學とを學ばんとするもの同に此邊に一考慮なかる可らず。吾人が見る所は即はち是れ。曰く、舊女學の勢力の根本は其の宗教感の素養にあり。今の文明女學の薄弱なるは、其の宗教感を養はざるに由る。而して、今の所謂る宗教的女學の均しく成功せざるも亦た實際の宗教感教育を重んぜざるが爲め也と。凡そ事物は其空名にあらんや、只だ其の實際にあるのみなり。

四

女學

本邦女子高等女子教育の程度

成瀨仁藏

現今の女子高等普通教育は大に專門樣の實用教育に偏して、智育を輕視し、之を第二位に置くが故に、女子の智育學識に至ては、甚だ不完全なるものあるを免れず、これ本邦將來のため吾人の甚て取らざる所也。否な、取るべからざる所也。然らば、如何にしてか、之を醫せん、曰く(第一)從前よりも一

層多數の時間を智育のために消費し、學校に於ては重に智力と學力とを修養せしめ。(第二)には高等普通敎育修養年限は高等小學卒業後四ヶ年となし、此間に於て十分生涯の基礎を築づかしむべし。吾人が高等女子敎育の年限四ヶ年とするも、決して理由なきにあらざるなり。請ふ聊か之を述べしめよ、現時の高等女學校規程に從へば、高等小學校卒業後二年若くは三年の短日月を高等敎育のために、殘すのみならず、女生は男生に必要なき裁縫、茶の湯、料理、其他家庭の實習、身の裝飾、等に多くの時間を消費するが故に、智育の程度、實に低く、殆ど小學校の區域內を脫する能はざる有樣にて、讀書力、學理研究力等、至て幼稚なれば、未だ何等の用にもたゝざるに、早既に廢學せしめ、一生中最も重要なる敎育時期を、空く無爲偷惰にして經過するの弊ありとす。故に今一層高等敎育の實を擧げんと欲せば、其の年限を增加せざるを得ざるなり。然るに世の論者中之れに反對して云ふものあらん、曰く「若し女子敎育年限を斯く延長する時は其の結婚期を失なひ晩婚に陷いるの恐れあり」と。是素より注意すべき事なれども、今日文明日新の世となりたるにも係らず、倘往古傳來の惡風なる早婚を善とし、娘にして二十に越れば、結婚期を失なひたりとて人も嘲り自らも悲む如きは、思はざるの甚しきもの也。實に今日の日本の風習は大に早婚に傾き未だ心身も成熟せず、智識も備らず、加之自ら獨立して、子女を養ふの力量全からざるに、早既に結婚するもの多きに居るに非ずや、是れ柔弱の國民を殖すの一原因たらずして何ぞ。故に今日は却て早婚の弊を矯むるの必要こそあれ。普通高等敎育年限は十七八歲迄に延ばせばとて、何ぞ晩婚の恐れありとせんや、殊に高等敎育を受けたる女子は、自然高等敎育を受けたる男子に嫁すべきもの多數なるべし。然れば、女子の結婚期も、自然從前よりは後くるゝに至るは理の當然なり。是れ双方の志業成熟準備のため寧ろ賀すべきの事ならずや。

高等普通敎育の女子に必要なるは、既に吾人の論述せし所によりて明白なりと雖ども、四ヶ年の普通學科を卒へたればとて、未だ一藝にも、一能にも熟達せるには非らず。換言すれば未だ半出來の人間にして一人前の人たるにあらず、故に余は修業年限三ヶ年位の一種の大學を起し、最高等の敎育を

受くべき資格ある女子のために專門の業を得るの便を開くの必要あるを信ずるもの也。已に數千人の高等女學校卒業生を出せる今日に於ては、少くとも、日本全國に於て、此の如き種類の大學一校を要すべし。故に先づ一の女子大學を關東に興し、漸次、關西に一校、九州に一校、都合三校の女子大學を興し、之を日本帝國に於る、女子教育の大中心たらしむるの必要あるべし。

然らば、本邦に於て起るべき大學とは、果して如何なるものなるべきや、素より今日の女子教育進步の程度に適合すべきは勿論なりと雖ども、今試に其部門の大要を列擧すれば、左の如くなるも亦可ならん歟。

○家政部
世態學　家庭教育學　經濟學　家庭衞生學
疾病學　家庭美術　心理學　小兒學
博物學　食品學　生理學　衞生學　實習

○教育部
社會學　應用心理學　生理學　教育學
教育史　教育文學　教育制度　女子教育學
家庭教育　小兒學　家政學　文學實習

○文學部
邦文學　支那文學　英文學　歷史
哲學史　教育學　家政學　心理學
實地演習

○音樂部
音樂　樂器　音樂論　音樂史
和文學　英文學

事宜に應じては
○理化學部　○商業學部　○體操學部　○美術學部
等を加ふるも亦可なるべし。

米國に留學せし 最初の日本婦人

曩に明治四年に當り、故岩倉右府の、朝命を奉じて、星槎歐米に使ひするや、時の政府、之と共に男女の留學生を米國に派遣せんとするの舉あり、而して其撰に當りし女子は、即ち大山侯爵夫人、瓜生海軍大佐夫人、吉益亮子、植田貞子、津田梅子の五人なりき。此五女史の洋行や、此時を以て正に我邦開闢以來、女流にして海外万里の異域に遊ぶの濫觴をなし、洵に我邦女學史上に錄して留むべきの事蹟なり。されば彼五人の中にも、最とも幼少にして、當時僅かに未だ六歲に滿たざる乳臭の齡を以つて、決然父母の膝下を辭して、十年の日子、異鄉に在りて生長したる津田梅子女史が、當年留學の回顧談を、親しく女史に就いて聞くがまゝを、記者の筆に綴り成して之を記さん」

◎當時政府が女子の留學生を米國に派遣せし目的は、万邦

文明の諸國と交際するに當りて、女子にも開化の空氣を呼吸せしめ、泰西の語學智識を學習せしめ、業成りて歸朝の曉には其獲たる智識を以て、女子教育に從事せしめんとの目的なりき、時の北海道開拓使長官黑田淸隆君は、實に此擧を主唱したるものなりき。されど女子の身として、ことさへぐ異國に、而も昨は洋夷と賤しめて、士人の希くは彼を屠りて寶刀に衂らんとせしとも多かりしもの丶本土に向つて、女子には寧ろ無用と認められたる日進の學藝を學ばんが爲めに、千万里の波濤を越え行かんなど丶は、中々に思ひも寄らざりし時代なれば、政府の彼五留學女生を擧ぐるにも、多くの撰擇拔粹を施さん程の候補者もなく、恐く彼五人は、進んで殆ど冒險と見えし洋行を志願したるもの丶限りなりけん。其留學期も十年間との定めなりしが女子にして、十年の長年月、家を辭して、異邦に在らんなどは、今日の如く交通自在なるにも、なほ容易の事ならぬに、まして當年に於て、幼少の愛娘を手放して、異人の國に送るは、其父母に、異常の決心ありしものと考へらる丶なり。五人當時の年齡は、最年長者吉益、植田の二女史は十五歲、大山侯爵夫人は十二歲、瓜生夫人は十一歲なりき。而して津田梅子女史は、最年少者にして漸く滿五歲十ヶ月、算へ年にて七歲、たゞ何の譯も知らず、父母兄弟と別れるとのつらさも覺えず、丸で無我無中に、人形抱いて、紅毛碧眼人の國に留學せり。

◎いよ〳〵洋行と事定まりし時、五人の少女は、宮中に召し出だされて皇后陛下簾中に在まして、謁見を給はり、且又御諭旨を拜したり。此時はこれ士族の子女に、陛下の謁見を給ふの初めなりき。

◎米國留學許可となりし時、官府より銘々に下渡されし、洋行の心得規則書といふものあり、木版摺半紙四枚綴りのものにして、左の如き文言の認められあり。

規則

一各國御條約書中に有之候條々は一々相心得可申候事

一何事によらず
皇國の御爲と可相成筋見聞の節は精々心を用ひ穿鑿を遂げ候上書面を以外國官又は神奈川大阪兵庫長崎新潟箱館の内外國掛御役所へ飛脚便之節可申越若又書通不便之節は歸國の上可申出事

一銘々父母の邦をはなれ外國へ罷越候義に付各覺悟可有之儀に候得共一身の愼方は不及申聊の事なり共御國の御外聞不相成樣心懸け可申且引當無之外國人より借財の儀決而不相成萬一旅費其外差支無餘義外國に於て借財いたし候はゞ歸國之節迄に何樣にもいたし償戾決て不義理の事

仕間敷若又引負等いたし其儘逃れ歸り追而相顯るゝに於
ては當人は勿論主家一類迄其時誼により急度御咎の上償
戻之義可被仰渡事
一海外旅行中御國人に出會候はゝ假令不相知ものに候とも
互に相親み其もの不心得之事有之候はゝ異見さし加へ或
は病氣等艱苦の躰見捨兼候はゝ可成丈扶助いたし遣可申
候事
一外國人に對し恨を含候事有之候とも可成は堪忍いたし不
得止節は其土地の役所へ訴立靜かに筋合糺しもらひ可申
何程忿怒に堪へざる事なりとも決て外國人を殺害いたし
又其爲疵負候樣の擧動致間敷事
一御渡の御印章は大切に取扱歸國之上可奉返納尤當御役所
に不限前書何れの港にても歸着の都合次第相納候而不苦
候事
一外國の人別に加はり候事并宗門相改候義堅く御制禁の事
一年限の義は別段御定無之候得とも凡十ヶ年は御許容可被
下候事
一年限相立無滯歸國の上は旅行中之始末委細に可申上候事

年　月

●規則中には宗門相改の義堅く御制禁とあれども、當時の男女留學生は大方彼地にて洗禮を受け、基督敎信者となりたりしなり、其頃恰も辨理公使として駐米中なりし、森有禮氏さへも、同じく洗禮を受けられしぞ聞き及ぶ。

◎星使の一行は總數百二十名、明治四年十二月、米國飛脚船に搭じて、横濱を解纜し、二十八日間の航路恙く、船中新年を迎へ、明治五年二月、桑港の金門に入りたり。扨て一行の中に女らしきものとては、僅に留學者の五少女ありしの

みなれば、時の日本駐剳米國公使デロング氏夫妻の、星使一行と同船にて歸國するに際し、政府は、デロング夫人に托するに五少女の監督を以てしたれども、夫人は日本語を操つることを知らず、少女は素より英語を知らず言語相通ぜざりしが爲めに、監督も屆かぬ勝なりしといふ。

◎一行桑港に上陸せしや、津田氏の微なる記臆に髣髴として浮べ出さるゝによれば、同地の外人等、日本大使の一行を見んとて、街衢に充滿し、何か大きく高き山の樣のものゝ建てられありしと覺えらるゝは、定めし、見物人の棧敷のかけ出してありしなるべしとぞ。米國人の眼には甚だ異樣に見ゆる容姿したる、百餘の珍客は巡査等によりて、推し分けられたる群衆の中をば、悠々と邌り行きたり。一行の男子中には、髷を結ひたるものも多く、少女等は、美しき模樣したる振袖長々と引き摺りて、頭にはさゝやかなる髷を結ひ居りたり。髷は船中にて少女等互に結ひ交したるなりとぞ。彼地の人民が、少女でこそあれ、日本の女子てふものを實見したるは、彼時が初めての事なれば、如何に奇異の感をや、發しけん。桑港よりは、其前年に初めて落成せし太平鐵道に乘じて、

華盛頓府に入りたり、途中市俄高にて、少女等一同は、洋服に改めたりといふ。

◎少女留學生等の、政府より受けし學費は一ヶ年千弗なりし上に、旅費も充分に給せられたり。されど異邦に在る少女の身、格別の遣ひ目も立たざりしが、また時としては、過分の贅澤を極め込みて、桑港にて九十弗の革鞄を購ひたることなどありしとぞ。また大使隨行員中の人また公使館員などには、此少女等に情をかけてや、せびるまゝに、二十弗三十弗と投げ出して人形など買ひ與へ、少女等はよき事にして、度々公使館に、ねだりに行きたりとか。公使館員、隨行員などは、少女を二組に分ちて、毎日毎夜交る〳〵、芝居、夜會等に連れ行き、夜の十一二時までも遊び暮し、時には室内留守の少女等の錠卸して熟睡せるが爲めに、〆出しの目を見ることなどもありしといふ。

◎華盛頓府に着してより少女等暫時他人の家に寄寓なし居りしが、後には、一人の敎師と一人の料理人とを雇ひて、都合七人にて一軒の家を持ちしが、五人は常に日本語を話し合ひて、一向に英語を覺えず、敎師が夜に入りて、九時頃に寢に就け

ば、それより少女等は、竊に再びガスを點じて、騷ぎ遊びて夜を更すことも度々あり、遂に此方法の良結果なかりし故、半年計を經たるの後、此家を解散し、其中吉益、植田の兩女史は都合によりて歸朝し、殘る三人は、所を分つて、他人の家に預けられたり。大山侯爵夫人、瓜生夫人の兩女史は、時の辨理公使森有禮氏より、一昨年來朝ありし博士ノースロープ氏に依賴し、ノースロープ氏は、また大山夫人を、ニューヘブンの博士ベーコン氏に、瓜生夫人をフェーアヘブンの博士アボット氏に托し、各其家より學校に通學せしめたり。而して津田氏は獨り華盛頓府に留り、レイマン氏なる人の許に預けられて、學校に入學したり。大山瓜生の兩夫人は、土地を隔つることも甚だ遠からざりければ、時々相交通することありしも、津田氏の他の二女史と遭遇することは、極めて稀れなりしとぞ。

◎津田女史の寄寓せしレイマン氏は、不幸夫妻の間に一子だにもなかりしかば、幼少の女史をば、我實子の如くに鍾愛して、十年一日の如かりしとぞ。女史も亦、我父母の如くに我儘をも自由に云ひつのりたるともありしといふ。或時の如き

は女史の他より貰ひ受けたる猫兒の迯げ失せしより、女史の之を悲しむこと甚だしかりしかば、レイマン氏は私金を投じて同種類の猫兒を、態々ニューヨルクより取寄せて與へたりと。其猫は女史が十年の後、一たび日本に歸朝し、六年を經て再び渡來せられし時にも、なほ存命なりしとぞ。毎年夏期になれば、レイマン氏夫妻は、女史を伴つて、諸方を漫遊せしかば、爲に女史の見聞に益することも尠からざりしとぞ。また彼地の人々は、誰によらず、この遠來の珍客たる少女等を憐れみ、また一つには物珍らしく思ひしと見えて、彼等は此處彼處より、招待饗應を受くるに殆ど盡日なき有樣にて、會ふ人ごとより親切に待遇せられしとぞ。

◎されど日本に來る外國人が、まだ珍しかりし時分には、彼等が市街でも通行する際などには、あれ異人がと、人々群集して、其後につき廻りしが如くに、米國人の目に日本人の物珍しかりし當初には、桑港にても、市俄高にても、華盛頓にても群集に踵け跡けられ、中にも小兒童等には、支那人と誤られて、Chinaman eats rats.（支那人は鼠を喰ふよ）と囃し立てられたりとぞ。

◎女史の本邦を出づるや、當時僅にいろは又片假名と、我名の眞字位とを覺え居りし位のことなれば、一年ならぬ中に、全く日本語を操ることを忘れ果てしが、たゞ其名の梅の字、些少の假名などは、折々物にもかき付け、又サヨナラ、お父さん、お母さんなどいふ言葉は、常々忘れじと繰返したれば歸朝の日、北堂と對談するにも、嚴父君の通譯を要せし程なりし中にも、左樣の語は覺え居られしといふ。間もなく日本語を忘れし事故、彼地にて日本人に合ひて、日本語話しかけらるゝが、恥かしきものから、態々我なつかしき同胞をも避けて合はざらんことを勉められしとぞ。

◎幼少ながらも、常に我は日本人なりてふ事を忘れず、追々年長じては、猶更の事なりしも、智慧の付く盛りを、米國に過し、而も十年間の長き滯留なりしかば、津田女史等の腦裡には米國風の生活風習の深く浸み込みて、今に去らず、且今時の渡來洋行する人々等には、中々に曉り得られぬ、該國の事情にも通ずることを得たりとぞ。

◎留學十年間、大山侯爵夫人は、ヴァッサー女子大學にて、高等普通學を修め、瓜生夫人は、音樂を專修し、津田女史は

中學を卒業して、各歸朝せしが、歸來祖國の文物外觀の劇變ありしを見ても、幼少此土を辭せし身の、昔をよくも記臆せねば、たゞ異邦に入るの感ありて、津田女史の如きは、殊に然りしといふ。各皆日本語を忘れ果てたるが、年暦だけに大山瓜生兩夫人の如きは、人の話せる言葉の、何となく、耳底に聞き覺えのある樣には感ずることもありしよしなるが、津田女史に至りては、さることも皆無なりしとぞ。

◎三女史、曩に遊學の途に上るや、皆な之れ垂髫の童女なりしも、歸朝の日は、既に見事なる可憐の處女と長じ、大山侯爵夫人、瓜生夫人は、いづれも良婿を得て、榮譽ある家庭の夫人となられしが、津田女史は暫く其時の外務卿たりし、今の伊藤侯爵夫人の通辯を務め居られしに、後下田歌子女史の桃夭女學校に教師となり、而して華族女學校の設立せらるゝに及んで、之に教授たり。居ること六年、再び米國に航して此度はフヒラデルフイア府附近なる、ブリンモア女子大學に入り、三年の間、理學を專攻して、學遂げ、名成り、理學士の稱號を獲て歸朝し、今や華族女學校に教諭たり。

◎因にいふ、岩倉星使の一行、歐米に使してより、今年二月は恰も二十五年目に當ばとて、市俄高府の一新聞は其紀念の爲、特に臨時號外の一冊子を刊行し、之には當年の隨行員並に男女留學生中の人々の多くの寄書を載せたりといふ。其冊子は未だ到來せざれども、接手の上には、面白き記事もあまたあるべければ、後日本誌に譯載する處あるべし。

附記最初の米國留學五女生が、着米當時の寫眞あり、之を寫眞版となして、次號に載せ、讀者と共に其往年を忍ばん。

○女學生の健康

文部省參事官寺田勇吉氏、小學より大學に至る各種學校の生徒健康上の狀況を詳述して、之を教育壇紙上に掲載せる中に、各種の女學校に在學せる生徒の健康狀況に就きて、記述論辯する處あり。以て吾人の參考に供すべき節あれば、其要概を摘記せん。氏曰く、

各種の女學校に在學せる生徒の健康は、之を男子に比し、猶ほ一層不良の現象を呈するは、從人の夙に憂慮する處にして、其學校衛生上の學理を講ずるは、實に急務中の急務なるものなり。女生徒にして、下肢厥冷、脊柱彎曲、慢性頭

痛、神經衰弱、視力減耗等を憂ふる者少なからざるは、吾輩の常に見聞する處にして、甚しき生徒の婦人病に罹るもの甚だ多く、教室内に於て、頭痛眩暈、腹痛等の諸症を發し、一時授業を休む者多きが爲め、休息室を增築し、急救藥を準備するにあらざれば、課業を授くる能はざるの高等女學校あり、要するに、身體の發育不完全にして、學科の數益々增加し、敎授法の不完全、敎科書の不適當なるに從ひ、生徒の健康、益々不良なるは、今日女子敎育の通患なるが如し、京都府高等女學校の統計に徵すれば、明治廿八年の檢査に係る本科生及び裁縫科生の體格の狀態は、統計によれば身長、指極、體重、胸圍、及び視力は、本科生の不幸なるに反し、肺量及び脊柱は、裁縫科生に不幸の狀況を呈せり。而して兩者殊に較著の反對を表するは、近視及び弱視は、本科生に甚だしくして、其不幸裁縫科生の二倍に達し、脊柱彎曲は、裁縫科生を犯すこと最も甚しくして、其不幸本科生に三倍せること是なり、約言するに本科生徒の健康を害するは、主として視力に存し、裁縫科生の健康は、脊柱彎曲に因て害せらるゝが如し。同校の校長は女子敎育上有名なる熱心家にして、近來特に意を學校衞生に用ゆること深く、醫員を設き、學校全般の衞生事務を擔任せしめ、務めて學校衞生の實を擧げんことを期せられたるを以て、近來漸次生徒の健康を增進せりと雖も其成蹟猶ほ前表の示すが如きは、實に嘆息の至に堪えず。就中本科生と裁縫科生と、其健康の狀態全く相反する者あるは何ぞや。學校相同じく、敎師相同じく、敎授管理の方法亦相同じきなり、而して相同じからざるは、獨り學科に多寡あるのみ。即ち裁縫科は修身、裁縫、國語、數學、家事、習字、音樂の七科にして、肝要なる體操科を缺く。本科は之に加ふるに、英語、歷史、地理、理科、圖畫、體操の六科並に隨意科たる漢文を以てするにあり、一言を以て之を約すれば、一は專ら力を裁縫に盡すと、一は其力を英語以下數科の學習に用ふるの別あるのみ此の如く學科の多寡に依り、其健康上反對の狀況を呈するを觀れば、學科の身體に及ぼす影響如何を推知するに足るものあり、又靜岡縣私立靜岡高等女學校囑托醫の調査に依れば、近來同校の生徒の健康漸次良好の徵候を呈せしは(1)裁縫時間割合に長く、從ふて腦力を要すること少なきこと。(2)生徒の負擔する仕事は、勞働を要すること多きこと、(3)三食の外少しも間食の弊なきに因ると云ふ。此等の事實によつて推考すれば、裁縫科は、衞生上之を他の學科に比し、其害少きもの丶如し。是れ他の學科は、高尙に過ぐるによるか、或は過多に失するによるか、或は修業年限の長短を異にするによるか、當局者の宜しく深く研究すべき所なるべし。

寺田氏は女子に對する學課時間の過多なるより、衞生上に及ぼす損害の多きをいひ、また女子躰操の良好なる改良を見ざるべからざるをいへり。氏且つおもへらく世人或は歐米諸國の統計に徵して、高等女子敎育の、却て女子の健康に良成績を奏せることをいへども、こは學校衞生の方法の宜しきを得たるあるが爲めにして、而してまた外國女子の健康は、以て我邦女子の健康を測度すべからざるが故に、高等女子敎育の女子の不健康を誘起すべしとの杞憂は、未だ除くべからず。況んや、ドクトル、クラーク氏の如きは既に米國婦人の敎育より受くる身體の弊害を痛論したるものあるに於てをやと。寺田氏の杞憂の如き、不當とはいはじ、高等女子敎育は拒否せらるべきものに非らざれば、氏の如き宜しく其杞憂を善用して、女學生健康の增進に關して慮る所あるべきなり。因にいふ、聞くが如くんば、寺田氏の引き出したる證據人クラーク氏の、高等女子敎育反對論は、十數年一昔以前の一杞憂

論にして、幸にも近來の女子教育の成績は、續々、クラーク氏の杞憂を排するの實例を舉げ來りて、彼反對論、今は殆ど全く往年の空論と消滅しつゝあるものとぞ。さるを寺田氏の事々しく、其論中に舉げたるものは何の故なるか。

教育

宣教師派學校を見ること如何

鷗村

信教の自由を渴望するの餘、父母の國を脫して、當時荒蕪蠻野の新英洲に、墳墓の地を定めて、之に上陸せしや、日ならずして教會と共に學校を起せしといふなる、清教徒の子孫が基督教を傳へんとして、我國に渡來するや、彼等は其祖先の遺事に倣ふてや、教會を起して老幼男女を教化すると共に、また學校を設けて、子女を教育するに忽せならず、之が爲に多くの腦力と、多くの財資とを費やしたり。彼等宣教師は、我政府の猶未だ、國民を教育するが爲めに多くの力を用ゐる

こと能はず、當路の漸く初めて學制を定むるか否かの、明治五六年の交に於て、早くも京濱神阪の地に、男女學校を創設して異域の子女の爲めに、盛んに歐米文化の學藝を講じ、眞理を說きたるは、頗る偉とすべきの事蹟ならずや、而もまた當路の學校を起し、學制を定むるの最初は、大に彼英米宣教師の指導に賴りて、僅に漠焉として五里霧中なる、教育道を辿り行くの方針を得たるのみ。女子教育の如きは、彼等宣教師の最も力を費やしたる所のものにして、神戸女學院、橫濱共立女學校の如きは、實に我國民の、女子高等教育てふものをさへ殆ど知らざりし時代に於て、宣教師等の設立せし所のものに非ずや、我邦女子教育の今日ある、其功の最多は之を米國宣教師の榮譽に歸せざるを得ず。

之を要するに彼宣教師の教育は、我邦教育今日の盛大を誘起するの木鐸たり、警鐘たりき。彼等の教育、素より多少の弊害を釀成したることなきにしも非ざるべきものも、猶其殊功は、永く之を我邦の教育史に傳へて、特筆大書すべきなり。然るに當路者の曩に編纂したる教育史の如きも、殆ど彼等の功を錄することなきは、教育史なるの體を成すに於て欠ぐる

處あるのみならず、また偏見狹量の忌むべきものを、彼等の事業の上に挾むの嫌ひなきこと能はず。

又今日に於てこそ、宣教師の敎育は、往時の盛觀を欠くと雖ども、猶彼等の嶄乎として、特色の旗幟を樹つるあり、其敎育法に於けるも、また異彩を放つものなきに非ず。其又精神的薰陶に於けるの力、他の官學私學に秀づるものなしとせず。されば宣教師派男女學校なるものは、啻に過去の敎育史中の偉觀なるのみならず、亦現今敎育界に在りて、頗る注意すべきの一現象に非ずや、且や如今彼等の中には、官規の學制を遵奉するものも多しと雖も、亦自由不羈の學制を立てゝ、子女の薰陶に從事するもの多く、其効果の如何は、敎育家の一研究を要するものに非ずや。

宣教師學校の我敎育界に於るや、優に一要地を占む。然るに一般の敎育家、敎育論者の殆ど此等を度外視し、時に之をいへは、たゞ其弊害を指摘し、若し之を罵詈することなくんば僥倖なるもの、是れ彼等が偏見狹量に由來するに非ずして何ぞ。彼等は單に傳敎の一方便のみと、見下して、之を眼中に置かざるをば、さも大人氣らしきことゝ思へるが如し。加之、第一流を以て推さるべき敎育論者にして、某の宗敎を學生に敎ふることは、違憲の大罪人なりとの、あられもなき暴言を吐いて、得々其愚を悟らざるものあり、其偏狹や、甚だ憫笑すべしとなす。指導開拓の功を、宣教師學校より奪ひ、また其現況を蔑視し、目して彼等は自家宗敎の爲めに私利を營むものとなすことや、墳墓の地を辭し、万里の波濤を越えて、異域の同胞の爲に、鋭意敎育薰陶の事業に盡瘁するものに對して、不敬之より甚しきはなく、敎育家、否國民として有る間敷き沙汰なり。臺灣島の文化の開拓の先鞭は、之れ英國宣教師マッケー氏が慈善博愛の熱意によりて着られたり。氏によりて初めて、臺灣島民は、日新文化の敎育の曙光を見たり。然るに、日本の敎育家は、之を見ること、マッケー氏宗敎の私利を營むものとして、而して一簣を以て九仭の功を奪はんとするが如き欲望を起して、氏が二十年間献身犧牲の鴻業を蔑視せんとするか。よもやさる暴惡の擧動は、あり得べしとも信ぜざれど、內地に於ける對宣敎師學校の實蹟を見れば亦斷じてさる事無しとも云ふ能はず。今日の多くの敎育家、敎育論者の流は由來官學に厚うして、私學を疎んじ、私

學中、別けても官規を遵奉せざるものは、殆ど其陋狹なる眼中に置かざらん樣に勉むるが如し。殊に宣敎師派學校を蔑視するは、これ宗敎界の一狀態のみ、乃公の預り聞くを要せずとも思へるが故なり。詮するに彼等たるものは、口に筆に、敎育といひ、國家といふと雖も、實に國家を愛し、眞に敎育の大道を重んずるものにあらざるべし。吾人の此疑惑ある、其當不當は、人よ乞ふ之を、彼偏見狹量にして、而も當時幅のきく敎育家、敎育論者の言論行動によりて判ぜ。

○敎育論者出でよ

學說を講述し、學務を審議し、時世の運向を示し、方針の指路を敎へ、以て敎育家をして倚るべく、赴くべきを知らしむるものは、實に敎育論者の責任なり。彼の敎育界に於ける地位、重要なりとす。敎育家、殊に滔々たる小學敎員の如きは、大に彼が指導を俟つものなり。されば、其見識智性の如何によりて、敎育界の損益すること極めて多々なりとす。而して吾人今日の多數敎育論者の智性識見に就いて、未だ大に敎育界の爲めに安んずる能はざるものあり、故に眞正の敎育家の出世を熱望すると共に、眞正なる敎育論者の屈起を切願す。

○敎科書採用運動の醜聞

敎科書採用運動の爲めに、多くの黃白は、多くの滿腹ならぬ君子の懷裡に出入し、多くの醜聞は、多くの地方に起りて、諸方に反響したり。頃日新潟縣にて、同樣の一大醜聞、あはれや暴露して、堂々たる敎育家先生、刀筆の吏の煩ひとなるものあり。子女に倫理大道を敎へんとする敎科書の爲めに、多くの醜聞と、多くの罪人とを出す、苦々敷ことなり。此度の醜聞には、彼は復吾人の耳ふるまで口八釜敷、國體とか、祖國の大道とかいふなる某社の關係ありたりといふは、以ての外の沙汰なり。而して、如斯き醜聞珍事を忘却したる、其敎科書と雖も、之を讀習する子女に至りては、其樣々の敎誡訓言を朗唱して、一向平氣なること、風の何處より來り、何處より來るを知らざるが如く、極めて無心無邪氣なり。されば又其敎誡訓言の文字も、格別の効を彼等に與ふることなし。

○春の敎育界

冬枯の空いつしかに面變りして、紅綠稍く天地に滿てんとす。春は万物蠢動するの季なり。敎育界の如きも冬天蟄伏の日を辭して、春候生動の時を迎へ、種々の運動は起さるべく、樣々の計畫は唱へらるべし。即ち敎育界には一花二花の開くべき折なり。然れども夏を經、秋に入りて、其果は如何に結ばるべきぞ。敎育界の運動は、万朶の櫻樹に倣ふて、開花爛熳たるありて、後結實の甚だとむべきなきに似せざらんことこそ望ましけれ。

○井上哲二郎氏の非世界主義

井上哲二郎博士頃日某處に、敎育に於ける世界主義を論難して曰く、近來往々世界主義を唱ふるものあれども、此世界主義といふや、意味極めて漠然たるものなり。敎育の偏狹に陷るを矯正せんが爲めに、世界主義といふは可なれども、敎育はもと國民を形成する唯一の大機關にして、其基礎を國民的ならしめざるべからず。然るに若し世界主義にして、非國民の主義ならば、決して敎育社會に應用すべきものに非ず。されど幸に非國民の世界主義といものは、未だ實行されつゝあらざるが如し。余の見聞には、方今世界各國は、悉皆國民主義によりて、其敎育を施しつゝあり。世界主義即非國民主義ならば、そは根本より誤りたるもの。始めて世界主義と云ふ事を唱道したる人も、決してかゝる意味より考へたるものにあらじ、眞に俗人の考を以て偏狹なる日本人の氣性を矯めんとの考より、案出したるものなるべし、其意味たる漠然にして、敎育上の主義としては、とても維持すべからざるものなり云々。博士乞ふ變ふること勿れ、俗人の所謂世界主義なるも

のは、學者が解剖的に定義を下すやうのものにはあらで、土壑を國民に据ゑて、廣く世界の智德藝學を收攬し、高く時世を達視するものなり。之を世界主義といふも云はざるも可なり、如斯きが即ち教育本來の主義ならんかと俗人は思へり。然るに國民主義なるものは兎角、偏狭に陷りて、井底の蛙を學ばんとするの弊ありて、これまた教育の主義として、害多きものなり。由來教育に何々主義とて、別々の色を取らんとするが故に、一方に墨守して、城壁を設け、詮もなき爭論をなして、學者をして其主義の何たるやの解明に勞せしむ。それ教育に何ぞ世界主義といひ、國民主義といふものあらんや、たゞ教育主義あるべきのみ。教育家は世界主義國民主義なんどいふ、無益の區別を棄てゝ、宜しく教育の大根本に徹底まて、其大道を邁すべし。

○教育界の墮落

『教育時論』教育界の墮落を叫んで曰く、

近時何んぞ我教育界に、怪行醜事を聞くの夥しきや。或は校規振はず、職員日に相閱ぐあり。或は學校職員にして、國喪中に痛飮放歌するあり。或は舍監にして竊盗を爲すあり。或は教員にして、無賴の破落漢と伍し、華花に現を抜すあり。或は、日夜不義の邪淫に耽るあり。其行爲の醜怪なる、實に教育者として深く恥づべき次第なり。勿論、此等の怪行醜事たる、唯其現時教育界墮落の一端を現はしたるもの、若し能く仔細に我教育界内部の眞相を探撿したらんには、以上に記すが如きものより、猶一層恥づべき怖むべき醜行汚聞、蓋し測知るべからざらん。其教育界の面目を瀆冒することと果して如何。

と、而して此を救濟するの道、當局者にして監督の實を擧げ、教育者にして其理想を高むるにありといふ。教育界の墮落、此無主義無節操の社會にして、今更驚くべきことにしも非ず。彼二法、此墮落を救濟するの道たるは勿論なれども、借て何に經由せしめてか、教育者をして、其理想を高大ならしめんか。漠然として其理想を高めよといふ、たゞこれ空言のみ。

○教育界の問題

文部省の、條約改正實施準備の爲めに、調査しつゝある教育上の問題としては、

一　國民の固有思想が世界的思想の襲來に逢へば自然の結果として變動を就學生徒の頭腦に及ぼすべきは必然なり、此變動に對して我が國風及び自主心を伸暢せしむるの法

一　國語と外國語との關係及び國語に變化を來たすときに於ける其教授法

一　宗教道德風俗等に關し彼等の相違に對する我が德育の方針

一　條約國子弟にして我國の學校に出入するものゝ取締及教育法

一　雜種兒に對する教育方針

一　條約國人の設立する學校の管理規定及び本部の學校との關係

一　教會學校の取締法

以上七箇條の問題の如き、其中終りの三箇條を除いては、餘りに急要の問題とも思はれず、條約改正實施後十年、二十年の後に、さる問題を實地に解釋すべき必要ありとせば、こは既に今日までに然かせらるべき筈なりしなり、終りの三個條の如きも亦、條約改正以後、始めて來るべきの問題に非ずして、最早二十年も以前よりして、重要の問題たりしも當局者始め、多くは之を不問に附し置きたるものなり。

沖繩九州八縣聯合教育會は、既に本月一日よりして、長崎市に於て開會されし筈なるも、吾人は今日まで、未だ其景況を報ずるものに接せず。筑紫沖繩の四の果てなる有爲の教育家諸氏、如何なる盛會を催して、論議研究を盡し、積勢以て我全土の教育界を振興せしめんとはするぞ。同聯合會の議事問題てふものは左の如く此等は總て、今國教育界の問題たらん。

一　兒童の心身發育は其齡何年より就學せしむるに適すべきか。

一　尋常小學校の課業を四年にて安全に修業せしめ得べきか。

一　小學校及び中學校教員の不足を補充する法如何

一　高等女學校の女生徒に對して、男生徒と全く同一の教科目にて適切なる教育を施し得べきか若否らずとせば其法如何、

一　高等女學校は一府縣に少くも必ず一校を設置すべきことゝなすの必要なきか

一　學齡兒童を正當の理由なくして就學せしめざる保護者に對する制裁を加ふるの可否

一貧困兒童を就學せしめ教育の恩澤を受けしむる爲め、之を補助するの方法如何
一寄宿舍に於ける生徒の訓練法は兵式的と家族的と何れを可とするか
一高等小學校と尋常中學校との聯絡を密接ならしむるに適切なる方法如何
一學校生徒をして數日間の長途遠足をなさしむる利害如何
一各學校の試驗に於て算術科に落第者の多き原因並に之に應ずるの方法如何
一學務委員をして充分盡力せしむるの方法如何
一九州に造船學校を設置するの必要なきか
一九州大學を設置する必要なきか

◎小學校長の地位

近頃嘆くべくも亦笑ふべくもあるは、小學校長の椅子を得んが爲伐に同黨伐異、競爭劇甚なるは、府下にも地方にも、屡實見すといふことなり。之より推せば給料の高くて事務も安樂なる椅子は、望手多く從つて競爭劇しく、之に反して、給料も安ければ、事務も繁忙なる椅子には、望手も皆無の有樣にて、競爭などは、夢にもある間敷なり。是に由りて見れは、彼等は、教育を以て第一、衣食の方便となし、已が智德を磨いて、人の師表たるなどいふことは、第二にも、第三にも退くること必然の勢なり。昔の聖人君子とも呼ばれたる教育家は、我德の足らざるを憂ひて、日に三たび己を省み、戰々兢々、深淵を臨むが如く、薄水を踏むが如くにして、躬行是れ勉めたりと聞くに、今日の多數教育家は、衣食の爲め、地位の爲めに、戰々兢々す。彼此德を分つ、霄壤も啻ならずといふへし。詮ずるに、彼等は教育家たるの本分を守ること能はざるものにして、我が子弟の師表として、仰くべきものに非ず。然るに此流の徒が、我教育界に跋扈し、之を壟斷すといふに至りては慷慨亦禁ずる能はざるものあり。彼等の此陋態をなす所以や、畢竟するに、其識見の高尚ならず、其度量の濶大ならざるに由らずんは非ず。

隨感

美なる實行の活例（其二）

女學雜誌第三百九十三號（明治廿七年八月十八日）の『逸事』欄を讀みたる人は、「美なる實行の活例」と題せし稀有の道話を承知せられたるなるべし。當時其の文の結尾に左の如く言へり、

此記の筆者は其實名を世に公にするの日あらんことを望む』

然るに、近頃の「鬨聲」に一救世軍士の署名をもて、下の如き文章掲載せられたり。正に是れ前年余が感歎して讀者と見したると同一の人につきて記るせる也。今や初めて其の名の公けにせらるゝに會ふ、則はち欣然として茲に轉載すと云ふ。

恩人吉田清太郎氏

一救世軍士

其一　余が見たる最初の救世軍士

若將軍ブース氏が古への聖徒エノクを名けて最初の救世軍士と曰ひ少年なる太閤を呼んで士官候補生の手本と申された筆

法を以てすれば余の恩人吉田清太郎氏の如きは實に天生の救世軍士若くは模範的の救世軍士もと評す可き人物であると思ふ余は嘗て新島先生を慕ふて遙々之を訪ねたれ共行くと程なく死なれて多く教を受るに至らず却て神の御攝理の下に吉田清太郎氏に遇ふとを得て茲に始めて活ける基督の御精神を帯し献身至誠己の如く其隣を愛すべしとの誡命をば文字通りに實行するの人を見ました是余が終生忘る可からざる神の御慈愛であります。

其二　證言すれ共說敎するを肯せず

明治廿二年の夏吉田氏は夏期傳道の爲に招待せられて備中高梁の町に行かれた余の記臆に由れば其當初歡迎會の席上で約翰傳第九章廿五節「基督が罪人なるや否我之を知らず我は瞽者なりしが今日明になれる唯此一事を知る」と乞食同然の小民が祭司學者の前に喝破した一節を讀み「自分も嘗て神の前には大なる罪人なりしが耶穌基督を信ずるに及んで彼は私を救ひ給ふた我唯此一事を知る此他更に諸君に語る可きとは有りませぬ」と十分間許りの證言を立て壇を下られたが爾來六七十日間折柄牧師の不在に際し毎度說敎を賴まれたれど何時も他の青年輩に讓つて自分は唯一回も演壇に上らず應へて申さるゝ樣「私は罪人であつたが基督の血は私を救ひ給ひました私の是非共諸君に告げねばならぬとは唯此一事である而して此一事は既に先日諸君に談して終つた故最早何も言ふ可きとがムりませぬ」と思ふに君は世の所謂說敎者牧師が毎日曜日に神學說を講じ社會問題を論じ徒らに古人の經驗を談ずるを見て之にあき足らず直に其丹心の證言を立てゝ其他に及ばなかつたものであります君の如きは誠に天生の救世軍士神の眞正の證人ではムりませぬか。

其三　有ゆる手段を盡して基督を證す

斯の如く基督の救の外何事をも知らざる君は何處に行いても如何なる人にも有ゆる手段を盡して唯此一事を宣傳へずは止まぬ人であつた其高梁滯在中余は一夜月光に或寂しき山手の街道に二つの黒い人影の立つを見近寄つて之を窺へば是なん吉田氏が一人の盲人なる乞食の肩に手を掛け之と基督の救を語つて居たのであります君は又嘗て數帖の半紙を買ふて參り之に大文字にて馬可傳を寫し毎日其五六枚宛を携へて之を或目の弱き老人に與へ之をして救主の一代記を學ばしめました

近頃感化事業のことに付て一書を著した何某の父は非常に頑固なる基督教の反對者であつて彼何某氏の如きも裸で雪の中に投出され又は半殺にせられたる場合も度々あつたことですが吉田氏が此頑固なる反對者を悔改めに導いた始末の如きは實に感ずべきの至である君が高梁町に行くや直ちに彼人を訪問し初めたが固より喜んで受入られる譯は無く「今は多忙で御話が聽かれません」とは何時もの定た挨拶であつた「何時か少しは御暇な時が厶りますか」「否不時の用事のみ多い故何時とて御相手になり得る時間は厶りませぬ」「其では折々端書を差上ます故何時でも御暇のあつた時一枚宛讀んで被下ませ」と是が吉田氏が基督教の大反對家に與へた最後の應答であつた其歸途君は直に一圓を投じて端書百枚を買ひ其より以後は毎日訪問傳道より歸れば直ちに筆を執りて一二枚時としては一日五六枚の端書に基督の福音の一端を認め續々之を彼反對家に向て差出した高梁の樣な狹い町で町内を端書の往復するなど云ふは殆んど例少いことであるに而も一日數枚の端書が必ず基督の福音を載せて到着すると云ふのですから終にはさすがの頑固な反對家の心も全く之が爲に破られて終ひました二月の末には「吉田さんに對しても私家で說教會の一度も開かねばなりますまい」と從來有名の大反對家は此度は其近隣の人々に迄も基督の福音を紹介するの人となつた六七年以來備中の高梁に行き其地基督教會の祈禱會に列る者は常に威勢好き而も至て眞面目なる一老人が「何卒悴何某を惠み其監獄改良事業の素志を貫徹せしめ給へ」と祈つて居る聲を聞たことを存じます。

其四　學生としての吉田清太郎氏

余は吉田君が學生として費した一年間の概況を知て居ます固より學級が非常に異て居た故學問上のことなどは些かも承知致さねど其宗教上道德上に於ける君の感化力の廣大であつたこと丈は頗る明白に之を知つて居ます嘗て一少年が神を瀆す語を吐つゝ途を歩むを見て君は直樣少年の姓名住所を尋ね置き後刻訪問して之を說諭し彼をして其非を悟らしめました又嘗て學校でも評判の亂暴者を其部屋に訪問したが彼は君を避けて遇はず「今少し用事がある故外出します」と申した君は懇ろに應へて「然らば御歸り迄待て居る可し」とて泰然として其處に坐を占め彼の靑年の歸るを待合せて居りました此堅忍と熱愛

とに由て彼青年の心も全く砕け須臾にして其室に歸り己が虚欺の罪を謝し謹んで君の教を受るに至りました後日此青年の告白す樣「學校中五六百人の教員生徒誰一人として己の恐いと思ふ者はないが吉田君に丈は恐入つた」と頃日組合教會中に最も篤信なりと許されて居る一傳道者は其信仰上の生命をは全く吉田君の奬勵に由て得たとを認めて居ます余は君が同志社在學の五六年間に學校から得られた所が少からざりしを信ずると同時に君が學校に與へたものが更に其幾層倍であつたかを驚嘆する者であります。

其五　己の如く其隣人を愛す

併し乍ら余が最も君に推す所は君が聖書に「己の如く汝の隣人を愛す可し」との誡命を文字通りに實行された一點であります而して余が君を「恩人」と呼ぶ理由も其一つは全く此處に存ります明治二十二年の九月余は同志社の豫備學校へ入るの試驗を終へ最早明日より課業が始まると云ふ前日になつて余が所持の金は全く盡きた因よりミユーラル氏を助け給ふ神に祈つて入用な學資金丈は支給て戴く覺悟は有て居たれど扨其場になつて斷食の一度もやつて見れば弱き信仰は聊さか動揺するを覺えました斯る時しも決死を以て信仰の道を貫徹せよ生きて京都の市を出るな」と權威ある忠告の語を余に與へた者は君であつた而して賄所の給仕を爲乍ら冷飯殘肴兎も角も三度の食事に有付ける樣周旋して與た者も君であつた加之自分自身さへも且働き且學ぶ一貧書生の身を以て如何にして得られたものか余の爲に大枚數圓の束修を學校に納めて與た者も實に我恩人吉田清太郎君で厶りました。

併し乍ら七八年後の今日尙ほ余をして感奮止む能はざらしむる者は君が一年間余の月謝を納めて與れた一事であります當時學校の規則として月謝は必ず三月分を前納すへき筈であつたが君は余の爲に特に故新島先生に請ひ一圓五十錢宛を月賦で拂ふの許を得而して一年間自ら余の爲に之を學校に納めて與たとであります君の寡言にして敬虔なる唯一回病院の芝生の上で余の將來を戒むる爲此一年間に於ける神の導きを語つた時の外嘗て人に向ふて一度たも此等のとに付て物語つたとは厶りません而して此間君が余の爲に盡して與た慈愛の如きは蓋し世に其類を見ざるものであります。

君は余を助くるとを以て神の聖旨なりと信じ一年間夏も冬も

晴にも雨にも日毎一外國教師の宅より他の教師の宅迄牛乳を運び之に由て毎月一圓五十錢宛を得其を以て余の月謝を拂つて呉れたのであります加之此牛乳配達の仕事が一時不用になつた際君は他に金錢を得べき途なきものから己が食料の中より余の月謝を支拂ひ其が爲十數日の斷食を爲に至り或時は御國の警視より強て猫の死骸を貰ひ受け人知れず之を食ひたるとあり又或時は鳥の飛た後に落たる果實を拾ひ昔エリヤをば烏に由て養ひ給ひし神を讃めつゝ之を食たともあつたそうです然り是が吉田清太郎君が一年間余の月謝を拂ふて呉た道であります。

嗟呼恩人吉田清太郎君、君に由て働らき給ふ天の父様愚かなる余は如何にして斯かる過分の御恩寵に處る可きかを知らず如何にして御厚恩の萬が一だも報い奉る可きかを知らず余を憐み導き給へ願くは汝と我恩人とに孤負するとなき者と余を爲し給へアメン。

編者因みに云ふ、吉田君は今ま伊豫松山女學校に教授たり。嗚呼誰か日本の女學を振はずと云ふや、東に大須賀君あり、西に吉田君あり、既に斯の如き人を有す、女學界も亦た富めりと言ふべし、誰か之を振はずとなす。

○薩摩琵琶城山曲

「夫れ達人は大觀す」の一句、喝破し得て城山の曲の冒頭たるに適へり。只だ身一つを若殿原に投げ與ふの情懷こそ、優に西鄕先生の眞面目を描寫するなれ。然るに、隼人の逸り男が獅子奮迅の勢ひを見、隆盛莞爾と、ほくそゑみ、亥の年以來鍛へたる腕の力を試めさなん、云々と云ふに至りては、如何にも大人の器宇にうつろはず、些々たる敵愾の氣あるに似て十年の役を其の本意の如く思はしむることそ殘念なれと思惟したるが、之を海舟先生に質すに及んで果然として覺りぬ。此等の辭句はすべて別人の加作せしものなり。海舟先生の原作なるものに就て覽るに、總べて此般の激句あるなし。凡そ。西鄕先生、月照と相抱きて水に投ずるの消息を解せざれば、明治十年、私學校黨に擁かれて城山に打死せし情義を悟がたし。西鄕先生豈に官軍に抗せんや、戰の中は只だ獵遊せしのみ。人もし之を愚なりとせば須からく笑ふべし、常人の大に笑ふ所は、鬼神の密かに哭する所なり。

評論

亦誰をか責めん

連りに痛罵の聲を聞き、もろ〳〵の經綸を耳にす。然れども尤とも切に吾が知らんヿを欲するものは、其の究極する所、何等のものを用ゐて最後の動機となさんとする乎にあり。金錢か、調査か、學問か、黨人か、抑も愚なる輿論か。凡そ大事業は成し易きもの也。何んとなれば、常人其の形跡を知らざれば也。暗に大勢を決し、默して機輪を轉ずるに、何の妨害かあらんや。必竟、世に其の成るヿの難きを言ふもののあるは、常人と競へばなり、素と大事業にあらざるが故なり。大事業成し易し、何すれぞ妄りに慨するヿをせん。今の平ならざる者、多くは局に當る者を咎む。左れど思へ、古來太平の世に、現に局に當りたるものが能く爲す有りたるヿ何處にある。大抵裏面に内助の人あり、若くは特更に名位を避けたる實際の師士ありて、以て能く當局の人をして爲す有るヿを得せしめし也。左らば、今の當局の人を責めんとする、究極は、遂に何人に責を嫁すべきぞ。慷慨の士、須からく思ふべき也。

動もすれば人輙はち歎じて曰く、人情紙より薄く、節義氷よりも冷たし、末世彌よ澆季に流るるを如何んせんと。左れど思へ、世間の人、口腹ありて衣食せざる可らず、親子ありて育養せざる可らず、多くは是れ日常日用の急務の爲に役々す、亦何の餘裕ありて大いに他の爲に鞠躬せんや。單に之を責めて重きを之を要むるは無乃ろ酷たるなき乎、何すれば別に其人を見て之に叱咤せざる。凡そ人心の感應は微妙不可思議にして言説に絶す、精靈の徹する所、具體有形の範圍外に超脱せざるヿなし。水の隱るるや遂に逬ばしらざるヿなく、雲の昇るや到底凝らざるヿなし、人苟くも精力を積み、氣根を養なはば、遂に不言不説の中にだに煥發せざらんや。幽玄神秘の交通を説けば、人往々にして曰く、是れ十九世紀理學の言論にあらずと。然り或ひは十九世紀の常識にはあらじ、而も其の二十世紀の通論たらんとするヿを否むを得る乎。

蓋し、世間到底、何ものをもて最後の動機となすや。詮じ來りて必竟最大の勢力あるもの果して何か。試みに閉目して徐むろに冥想せよ、結局の威力何處の邊より起り來るぞ。吾が智慮の弱きを知る、吾が財貨の乏しきを知る、吾が黨與の耗きを知る、遂に不足を感覺して大いに自から要求せんとするものの何なりやと思へ。嗚呼、噫、吾が決着の未だ固からざるを知り、吾が膽度の未だ定まらざるを知りてよりは、一大安心の先づ腔子裏下に決定して、捨生献命の覺悟斷然として落着かざる以上、遂に亦た何處に何ものをか求めんとは恥らふべし。正に是れ眞智の露はるゝ時なり。

抑も忙々役々たる事業はことの尙ほ末なるものなり。事業もと善悪の定まりなし、必竟は其の人によりて變ず。人によりて變ずるにあらず、其の本躰の發露する所によりて變ずる也。吾未だ救世の慈悲に滿たず、吾未だ拔苦の伎倆に慣れず、吾未だ自から安んずるの才智なしと思惟せん時、其の能く爲す所ろ果して何事ぞ。凡そ事業を興すものは、先づ吾が本躰の實地何如んと省りみざる可らず。

左らば則はち當世の急務なるもの亦た知るべき也。機勢の一轉を看、人心の萎靡を眺め、亂兆の漸やく迫るを察し、一大時變の日ならずして到來するとを信ずるに於て、大聲疾呼して告げんとする所の第一人は抑そも吾以外にありや。もし告ぐべきありとせば則はち吾以外になしと云ふの一言即はち是告ぐべき耳。

義人十人あるの邦家亡ぶるとなし。眞智一人ありて衆生に迷はんや、徒らに慷慨して世を騷がしむるの價値何程ぞ。之を究極して吾自己の修養に省りみざるあらば、遂に世の災たるに過ぎざる耳。

故に思惟すべし、吾が膽識の大いに養はざる可らざるとを、吾が赤誠の濃やかに修めざる可らざるとを、而して吾が手腕と吾が伎倆との大いに磨せざる可らざるとを、世事を評論して當今に憂ひを爲すの決局は遂に自己の修養に歸し、深く反省して吾が精靈の上達に苦慮するの外、遂に亦誰をか責めん、天下尤とも責任あるものは、即はち吾自己なり、もし他を責むる程の事を知るものあらば、吾自己の責任は更に彌よ重大なるにあらずや。茲に此の説を吐く所以のもの何んぞ諸君を責むると言はんや、只同もに自ら責めんと欲する耳。

雑録

故博士ハーツホルン氏
青山墓地の詩

去月十日築地の寓舍に永眠されたる故博士ハーツホルン氏が二年以前再び我國に來らんとして、旅裝を整へ、將に本國を辭せんとするの前夜、遙に思ひを日本に馳せ、今次の遠遊、希くは骨を青山の墓地に埋むるあらんものをと、靜想凝りて一律の詩となれり。其詩に曰く、

AOYAMA.

Beyond the crowded city's utmost reach,
Near but to hospital and college halls,
Where on the ear no sound repellent falls,
Only sweet bell-tones, or soft Nippon speech;
Where moss-grown tomb-stones their weird sermons preach,
With silent liturgies of attendant trees,
Stirred now and then to whispers by a breeze;
Where all things "man is mortal" gently teach:
Are we not farthest there from all the din,
Oft-times discordant, of the haunts of men,
Where love and joy are fain to enter in,
Yet strife and sorrow come and again.
Where, on this earth, I make my last remove,
Be it to Aoyama, Hill of Love.

H. Hartshorne.

Written in anticipation, Germantown, Pa.
8 mo. 15,1895.

この篤信敬虔の好詩人は、あをやまを見て、あいのやまとなし、此處より天に歸らんことを欲せしが、預想讖を爲し、其遺骸を茲に、彼が所謂 Hill of Love に留めたり。此詩の成りし、既に二年以前にありしも自ら深く之を秘して、未だ曾て人に示さゞりしが、其の二月九日夜其臨終近きに在るを知るや、初めて之を明かし、留めて孃君への紀念とし、計らずも豫想の成就せしを歡喜して長逝ありしとぞ。

因に云ハーツホルン博士は元と醫家なり、されど志教育に厚く、其米國に在るや、二三の男女學校の校長に歷任して、子弟の薫陶に從事されしことあり。また文學に通じ、詩作に長け、其詩集の出版されしものあり、亦其筆に成りし小說これ有といふ。

下層の社會

一賤生

聞說數年前一二の新聞紙上に專ら下等社會の探險に從事せし人々が、饑寒窟或は貧天地など題して、其記事を公にせら

しことありと。當時其記文を讀みたらん程の人々は、恐らく下等賤民が處世の狀況に付て、かつて夢想だにせざりし奇怪とも悲慘とも云ふべき事實を知得し、一片同情の念に堪へざるものありしならん。余や實に饑寒窟貧天地に生活する一賤民にして、身親しく種々の勞役に從事し、又幾多の辛酸困苦を經驗せり。從つて此社會に行はるゝ不義兇惡貪婪無道の弊風を見聞する數年、然れども幸にして假令泥土に汚れざる白蓮の節操なきも、身未だ其忌むべく惡むべき勢力の侵賊を蒙らず、現に其暗闇汚穢を極めし事實を審にすると共に、彌々蓋目洗耳の感を深うするなくんばあらざるなり。人あり余に勸むるに其親しく見聞せる悲慘なる事實を記し、世上幾多の仁人君子に對て此の憎むべき罪惡に沈淪せる憐むべき同胞を救導するの要を訴ふる、亦決して其徒勞ならざるを以てす。余や能ふべくんば喜で其勸告の如くせん、然れどもこれ賤劣余の如きが決してよく爲得ざる所、況んや貧天地饑寒窟の記者の如き觀察の明なく起雲生風の文筆を有せざる余の如きに於てをや。唯だ余は今日までの記臆に依て、覺束なくも社會の下層に於ける狀況の一斑を記し、以て後日に存し、聊か反省の資に共せんと欲するのみ。

木賃宿の金殿玉樓

下等賤民の多くは、府下各所に散在せる木賃宿に宿泊し、一夜四錢の宿料を拂ひ、垢に塗れ一種云ふべからさる奇臭を放ち、汚き虫の這ひまはれる一枚の四幅蒲團中に榮華の昔を夢み僅かに終日の勞苦を休むるなり。然れば此汚穢極まる木賃宿、我等下等社會の者にとつては、眞に金殿玉樓の心地ぞせらるゝなる。(余本所花町の木賃宿何々屋(屋號は態と云はず)と云へるに宿かると久しく、從て其近傍に於ける木賃宿の樣も大方は知り得たれど、當時余は唯だ一身の糊口に忙はしく、種々奇怪なる事實を見聞するも、それらを記し置く等の遑なくて過つれば、今は我が薄弱なる記臆を搜りてかき出る外はあらず。)實に今こそ金殿玉樓の心地せるも、その以前身の落魄に便るべき人もなく、もてる金さへ次第に殘り少なくなり行き、今は普通の安泊りにさへも宿りがたければ、さては是非なくも、この木賃宿を尋ね漸くにして宿かりし其夜は、五月雨の晴間なく降しきるに、垢と油とにて濕氣を含める蒲團

の、一層ヒタリ〳〵と頬と手足とに粘付如き心地するうちに、漸く床の暖まる頃には、縫目または綿のうちに潜みかくれ居たる虱の血に餓ゑたるが、襟元袖口裾のあたりより、次第に躰内にくゞり込み、所選ばず咬み立つるその痒さ、手さぐりに捕へて、始めは蚤と思ひつぶし見るに、グシヤリとして指の腹に水多く殘る様子、さてはと枕邊の薄暗き燈火にすかし見れば、果してそれなり、餘りの氣味悪さに身も打震ひぬ。そが上に蚤も多ければ、宵より四時頃までは一睡もなさですぎたるが、さて傍を見れば鬼をもあさむくべき大男兩三人、また肌寒き此頃赤條々になりて、胸のあたりまで蒲團を跳かへし、鼻嵐の烈しき鼾の雷を轟かして正躰なく睡れる羨しさ、苦しさも術なしとも、悶へにもだへて一夜を辛らくあかしたる此折、いかでか金殿玉樓の感あるべき。

二月を稻がい、六月を濕氣月と云ひて、勞役社會の殊に忌み嫌ふ時期なりとす。毎年一月中旬より次第〳〵に勞役者の需要減じ、二月より櫻時までは彌〳〵甚しく、一般何業に限らず不景氣を喞ち、それより五月下旬よりは、雨天勝ちなるため殆んど一月は一日勞役して二日休まざるを得ざる如き様にて、勞役者の大厄難は此期にあり。「土方ころすに刃物はいらぬ雨の十日も降れば死ぬ」とは、よく土工夫が唱ふところなるが、雨の十日はさて置き五日ふりつゞけば、實に悲慘極る境界に落入るはまた止むを得ざるなり。余が木賃宿に最初の宿りを求めし時は、實にこの大厄難の時期にてありき。苦悶せる一夜を送つて、明れば昨夜の雨は今朝猶ほ降つゞけり。平日は未だ全く夜の明けざる頃より起き出でゝ騒ぎ立つる人々も、雨の音を聞ては飽迄睡りを貪るを常とす。

ヤイもう起ねーか、何時迄寢て居るんだ！彼此十時だぜ。

起すものは蓋し其朝飯の錢なければ、寢たる友に借らんがためなり。寢たるもの僅かに頭を擡げ、

打捨て置ねー、さつきにから目は覺めて居るんだ。十時だらうが十一時だらうが、大きにお世話だ。朝飯を〇〇ヌキにするつもりで、態々寢て居るんだらうぢやねーか、氣のきかねー、起す奴があるものか。それはさうと手前錢の五六百もあるんなら、明日まで貸してくれお願だ。何だ錢をかせ？、ヘン面白くもねー、今日は此間天星（酒店）で飲んだ割前を返して貰はうと思つて居るのだ。手前

にかすどころか、此方で借りてへから、今も御親　様に起して遣つたのだ、仕方のネー野郎だ。

彼等は既に朝飯の錢なし、晝飯と晩飯とを如何にせんとするか。兩人は同宿の知人を悉く說て、五六錢の金を借らんとして得ず、終に近隣の木賃宿に在る知己を訪ひて、其目的を達せんとして遂げず、遂げざるも道理、彼等が訪へる知己はこれ恰も彼等と均しく朝飯をヌキにせる人々なればなり。彼等は他に借るべきの術策盡きて今は遂に意を決して、其上着とせる古びに古びし一枚の布子を脫し、宿主の紹介を得て古着屋に賣却したり、余は其夜彼の兩人が語るを聞けり。

明日の天氣は如何だらう？雨は少し小降りになつたが、何にしても一枚脫いだらエラク寒いぞ、ヤイ手前まだ四百もつてるだらう。己れも此處に三百あらあ、兩方で七百よ、よしかそれで兕（濁酒）をかぶると云ふのはドーだ。

ムーそれもイーが明朝の辨當代がネーゾ。

知れきつたことを云ふナ、篦棒奴七百で兩人が朝飯をドシと喰つて辨當までもつて行くつもりかドーセ足りネーんぢあネーカ、明日は明日よ、江戸子は宵越しの錢はもたネーと云ふこと忘れたか。

そんならさうして一盃飲むとしよう。

かくて七錢の銅貨は他に歸して、憐れや兩人は明朝の苦を知らず顏に、醉ひ臥しぬ。眞に彼は金殿玉樓に今しも眠れるなり。

怪しの男女

奥の方に三疊の一室あり、こは便所に通ずる廊下の横手なれば、余は幾度か其部屋の前を往復せり。余等が前夜寢たる部屋は四疊半に五人を容れたる最下等の塲所にして、一夜四錢を拂ふものなるが、彼の奥の三疊は別間と稱し、一夜十二錢乃至廿錢（一人なれば十二錢二人なれば二十錢）を拂ふものにして、最上等の部屋とす。此部屋を借れるものは年頃三十四五と覺しき職人躰の男と同じ年輩の婦人とにして、傍らより見れば誰しも夫妻とし思ふを免かれず。余も最初はしか思ひ居たるが、後に至りて其夫婦ならざるを知れり。朝、宿の下婢が竈を焚きつけざるに先ち、彼の婦人は夙に起きて米を炊ぎ、彼の男子は夜の全く明けざるに喫飯し、倉卒出で行くを常とす。婦人は其跡を取かたづけなどし、これも暫らくして出で行くなり。然して

同宿の人々は、そも彼の男女が果して何者なるかを知るものなし。或時は夜中二時頃に出で行く事も屢々なりと、宿の主は訝しげに物語れり。余も奇怪の念に堪へず、注意するともなく、彼の男女は如何なるものぞと常に眼をとゞむるに男子はいつも午前十時頃に歸り來り、十一時過る頃婦人もかへり來り、正午の號砲を聞くと共に、此度は兩人連れ立ちて出で行く事例の如し。かくてある事數日（雨天の日は早朝出で行かず、正午より兩人連れ立ち行くなり）。余は一夜其隣室に睡りて、男女兩人の談話を聞き、此に數日の疑を晴し得たり。

もう金もなくなる、毎朝早く出た處で、先達てのやうな甘いとはなし。それに師匠の御蔭で、お前さまも私しも先づ一通りは遁れるやうになり升たから、一番發して四五日うちから始めるとしましよう。あなたには何と御氣毒様ダガ、最初は左樣さ、慣れるまでは妙に恥かしい氣がしていけぬでしようが、少しのうちの辛棒サ。さうして居るうちには兄貴も歸て來る、それまでの喰ひつゝきが出來ればよいのですから、私も嫂のお前さんと斯して居るのは、世間躰も悪しと云つて、分れて居ては猶更兩人が立ゆかなくなるから。

婦人は徐ろに答へて、

毎朝私が止めるのも聞かず、あの様に早く出て行きなすつても、さう／＼甘いとがあるものかね。此間のはホン／＼まぐれあたりとでも云ふノサ。三十圓のお金がさういつもいつも人通りの多い處に落ちて居れば、萬年町の友達衆はみんな大金持になるよ。それよりか私しは飴屋の方がいくらよいか知れやあしない、お前さんも全躰器用だから割に早く覺えたのだよ。私しもどうかこうか地もやれる丈になつたから、今まで辛棒して稽古した躍を無にしないやうにせねば……

余は思はず噴出さん計りになり、いそぎ蒲團のうちに頭を引込まして、さては彼の男、或時何處にてか道に三十圓の金を拾ひたるより、其後紙屑拾となり萬年町に友達を有する身とはなりしよな。されば時折各所の縁日の翌朝二時頃より往來を捜しまはり、再び三十圓を得んとするものならん。正午よりは飴賣にならんとて躍りの稽古に行き、嫂を賴み地を彈て貰はんとせるに、嫂も三味線を久しく彈ぬ故同じ師匠の元に行

きて復習せしものにして、男の兄は遠く布哇へ出稼せるよしも後に分明せり。唯だ嫂が午前に行く處のみは知るを得ざりき。其後兩國の邊にて余は度々彼男女の飴賣を見事ありき。

井戸屋人足

綿フランチルの古襦袢一枚に、淺黄股引の膝のあたりに異り色の膏藥然たる接布をあてたるを穿き、赤毛布の汚れて黑みたるを頭より達磨の如くに引き纏ひたる男あり。五十路に近からんとも見ゆるが、頭髮は腦天まで禿げて、耳の上より襟元に殘れる毛は、縮れたる上に所々泥に塗れし痕あり、眼丸らに鼻廣がり唇厚く頰髯針の如し、額口より左の眉に達せる傷痕斜に、いとゞ銅色せる面色に添て黑痘痕一面に蔓れるさま、實に惡鬼羅刹とはかゝる貌をや云ふらんと、一見余は思はず身を震はしぬ。さすがに彼も寒むかりけむ余が手をかざし居る火鉢の向へ無遠慮に坐し、余の顏を覗き込みつゝ、胴魔聲の調子低く、

オイ若えの、お前何か働くつもりでゞもあるのか知らねえが、まだ懷に錢が一貫でも二貫でもあるうちはダメダよ。

その錢がなくなつてから、いよ〳〵明日食ふ事にさしつかへる段にならないうちやあ、とてもお前なんか仕事は出來ねエ。それに第一着衣が肝心だ、瞽の腹掛股引は申す迄もなく、上着も印もんでなくちやあ……ムー雇主も兎角押出しのきく拜見のいゝ奴に餘計錢も拂ふノサ。先づお前なんかあ、さうだ井戸屋がよからう、明日天氣だつたら井戸屋へ行くとしなせえ。別にナニむづかしいとはありあしねエ、玄蕃桶を大勢で引張ればいゝノサ、常用廿五錢と云ふんだ、行く氣なら明日一處に行かう。

余は最初甚だ不氣味な奴とは思ひしが、顏に似合はぬ親切者らしきに、余が勞役に從事したき旨を告ぐると共に、何卒種々心得となるべきことを、敎へ呉れよと賴み、五錢許りの菓子を求めて喰はせし効能は忽ち顯はれて、彼は猶ほ種々の注意をなし呉たり。此に最も困却せる一事と云ふは、余は近眼なるが故に、平常眼鏡を用ひざれば六尺以外のものを明視する能はざるとにして、かの鬼男もこれには閉口せり。さて止むべきにあらねば、彼の男の周旋にて淺黃地の股引及び腹掛仕事着等を買調へ、草鞋の穿き方まで敎へられて其夜は

一種名状し難き感情を抱きつゝ睡りにつきたるが、例の半風子は一層其勢を逞うし、新労役者をして屢々立て衣を振ひ、終には全身を掻き破らしめ苦悶のうちに夜を徹せしめたり。暁天漸く白く夜来の宿雨全く晴れぬ。傍なる鬼男は余を呼びて支度をなさしめ、己れもまた服装を改めたるを見れば昨日の様に似もやらず、印袢天二枚重ねたる下に、黒の腹掛股引もさのみ古びたりとも見えざるを着し、弁当箱を携へていざ行かんとて出でたつ様子の餘りに異なれば、それとなく問へば答へて、

ナニ昨日は友達に貸して呉れと餘儀なく頼まれ、雨は降るし、己れは寝て居ても済む譯故貸してやつたノヨ。

それより飯屋にて食事を終り、弁当を包みて二葉町と云へる所に伴はれ行きたり。余は途中屢々己が服装を打見やりては何となく恥かしき心地し、また深く我が身の零落を考へ来れば、知らず／＼ものかなしき情の胸に充ち、兎角に茫然たるに、鬼男は後より注意し呉るゝとも再三にあらず、

氣をつけチー、茫乎して居る所を見られると、おどかされるぜ、何でも人前さへうまく胡魔化せばいゝのだから。

井戸屋には、余等の外既に十四五人の人足ありて、雑談囂しく猶ほ後より次第に入来るもの、いづれも異様奇態の人物なるが、これ皆木賃宿の常客連にして、死ぬに刄物を要せざる人々とこそ知られたれ。

軈て人数のそろひたるを見て、世話役となれるもの、至て横風なる言葉を以て、仕事先に今日しも入用なる井戸框、滑車、鍬、鋤、玄蕃桶、引綱、踏板、畚、小棒其の他種々の道具類を車に載せよと命じ、一々これを験べ了り、いざ行かんと三十名に近き人足の隊伍は繰出したり。途中世話役は口喧しく先に進むを止め、後に遅れたるを叱し、四臺の車は三町位毎に交代せしめ、漸くにして向島なる某處に達せり。其間鬼男は余のかはりとて二人分車を挽きつゝ、自分は仲間中にても意張得るもの、世話役と雖も自分に對しては、萬事閉口し居るなど得々として物語れるも、眞に彼は余を欺かざる事後に至て明かなりき。仕事は始まりぬ。余等十數人は一本の引綱に縋りつき、井戸職人がかくる高調子の音頭に應じ、力を入れて引きつゝ、高き踏板を歩み下り、玄蕃桶を引き上げ、溜れる水を汲みて、また綱を緩めつゝ、踏板を上り、往復數十

回汲んでは捨つる水、瀧の如くなるも湧き早きためか、午前十時に至て僅かに一尺半を干得たりと云ふ。十時に世話役は煙草〳〵と呼びつゝ、暫時の休憩を命じたり。

休憩を命ぜられたる我等は、右手に堀り起せし土石の傍に藁薦を敷て、各々煙草など吹かし居たるが、皆口々に世話役の惡評を云ひ罵りなどす。余は諸人の有様を今更の如くに打見遣れば、いづれも其容貌態度服裝等より、言語に至るまで、一として卑陋賤劣ならざるなく、彼等が其知友と相語るや、余の如きは殆んど彼等相爭鬪するにあらずんば、非常なる不和たるかを疑はしむ。

ヤイ‥‥人が呼だら返事をしろ、此の間抜め、ダカラ人から鈍智など云はれるんだ。

なんだと聞た風な口をきくな、手前の樣な痴愚が出る幕ぢあネー引込んで居ろ。大間抜奴、舌でも嚙んで死つてしまへ、汝がやうな死にそくないは、打殺して、穀潰しを一人でも世間に減した方が人助けにならあ。

生云ふなこん畜生、喰ふや喰はずに居る人間とはヘン憚りながら人間が違はあ。雜言吐くと土手腹蹴破つて、砂ァつめ込んで糞溜のなかへ放り込むから覺悟しろ。

かくて相互に惡口嘲罵殆んど至らざるなく、傍に聞く余は彼等が相罵しる間に、顏面に笑を浮ぶるを見るにあらずんば、恐らくは喧嘩爭鬪とし思ふ外なかるべし。これ等の語は彼等が相交はる親密なるに從て屢々發せらるゝものなりと云ふ。

余は不圖傍に三々五々相集つて其頭を一にし、低聲何事をか相談するものゝ如きあり、近寄りて伺ひ見れば、衆齊しく仰で余の面を見、然してのち再び何事をかなせり。彼等は絶ずおのが身邊を警戒するものゝ如く、常に他人の往來に注意せり、余は此に於て漸くに知り得たり、彼等は法律の禁制せる博奕をなせるなり。

此の十分十五分の休憩時間に於てすら、薄氷を踏み深淵に臨むの思をなして、此の罪惡に耽るなり。彼等は午食の資として用意せる僅かに三錢四錢、決して十錢より多からざる金錢を賭して、萬一の利を得まく望みつゝあるなり。其の獲る所も、恐らく全勝を制し得たるものにして半圓金に過ぎざるなり、然して多くは其囊底を拂て午食を得るに途なく、止を得ずして其價を知人に借るにあらざるよりは、午食をなす能は

ずして、多くは其空腹を忍び日没に至るもの少からざるなり。勞動は再び世話役の命令によりて開始せられ、先の如く高き蹈板を昇降し、十二時に至りて午食休憩時間として三十分を與へられぬ。余が辨當を食しつゝある間一人の男は唯だ湯を飲みて其携へ來りし辨當を食せざるものあり、而て他の一人は己れの辨當を食せし上に、湯を飲める男の辨當をも併せ喰ふを見たり。餘り奇怪に覺えし儘彼鬼男に向て其事を尋ねければ、鬼男笑て答ふるやう、彼湯をのみ飲る男は午前の休憩中に賭博に打負け、遂には其携へ來りし辨當をさへに、他人の有とせられしなり。かゝる事は日々珍らしき事にはあらず、彼辨當を食せる男は、今日しも僥倖にも合せて三個の辨當を得たるなり。彼は今日の夕飯を既に得たるが故に、非常なる滿足を感じ居れりと。余は實に喫驚啞然として殆んど其實事なるやと疑ふ計なりき。余は幸にして彼鬼男の助言により、常に引綱の最後にありしを以て、毫も膂力を要せず、唯行つ戻つ數十回數百回恐らくは數千回を往復せしかば、足の疲勞最も甚だしくなり、三時に十五分の休憩をなせしのちは、唯だ一刻も速かに經過して、終業の時に至らん事をのみ希ふも、日輪なかなかに傾落せず、鬼男は云へり今日しも我等は五里餘の道を、しかも坂路を走りつゝ昇降せしに均し、然れども御身の如きは蹈板を往復せず、平地を行きし故に、我等に比しては三分の勞を減じ得たるなりと。蓋し然らん、然れども午後五時半に至り、漸く終業せし頃余の足は、其重き事千斤の鐵塊も結びつけられし心地せり。暮色凄然新月既に淡光を放ち、淺草寺の晩鐘、墨水の面をかすめ來る頃しも、歸途につけり、鬼男例の如く無遠慮に粗暴に語て云ふやう。

ドーダ、隨分骨が折れたらう始めてだから、しかし今日はこれですてきに樂な仕事だつたのよ。眞劍仕事となれば、己れのやうなもんでさへバ●テ●、(疲れて)しもふから、途中でズ●ラ●カ●ッて(逃げ出す)しまふこともあるのよ、廿五錢なら宜い仕事サ。

嗚呼拂曉星を戴て出で、暮天月を負ふて歸り、終日流汗勞苦して得る所如此を思へば、余は唯だ潸然として涙の流るゝを止め得ざりき。井戸屋人足は此日より猶ほ二日間雇ひつゞけられ、余は翌日鬼男に勸められ、進まぬ歩を向島に再び前日に均き單純なる勞役に從事せんために移せり。噫これ實に余が

下等社會に入門せる最初の時に於て、見聞せる事實なりき。

刺ある蝶（一婦人の悲しき日記文）

こは病身なる子の爲めになやめる一婦人の日記の内にありし述懐なり之を讀む人のうちには或は同情を表し玉ふ者あらん

めぐみ深き父母のもとにある時は世の憂事も知らでありしを束の間に十八歳の春を迎へかの家に嫁づきてその明年の卯月半に○○子を生み侍りしより心の悲みのみ絶ゆる時ぞなき。○○子の生れてより五月六月は事もなく過ぎつるが○○子はふと病に罹りそれよりは常にわづらひ勝にて二年三年が間晝は日ねもす無理いひくらし夜は夜すがら泣きあかしたま〳〵水徒づらをさせてもぬれ手をあげておのがひぢを傳ふ水のわきの下へながれ込むを稀有とく喜こぶなどよその子の異なりてあやしきものから醫者よ藥よとの心盡しはいふまでもなく針灸に至る迄人の勸むることは何くれと手をつくしゝ甲斐ありてかそのいたはりも追々遠ざかり後れがちながらあゆみもすれば物もいひ嬉しくおもふ内にまたもとの病が根となりて癇てふ病にかゝりぬ。行く春秋はかはれどもかはらぬ病を如何にせむ七年八年となりておなじ年ごろの子は學の道や其上に三味よ琴よとさま〳〵に愛らしく又しとやかに育てらるゝを見るにつけ親の心はいらてども甲斐なしや一たびは強て學校へ連て行きしが何とがもなき隣りの子供をかきむしりなどあさましき事のみして物ならふ見込みも無きまゝにむなしくうち過ぐるうち弟は早や讀本を始むるやうになりそのまた弟も物いふ程になりても姉のみはいろはのいの字も得かゝず氣嫌よき時はわからぬ事を獨りごちつゝ戯ぶれ遊べどその處へふと誰れでも行けば忽ち氣は狂ひてあたりの物を投げちらすやら何も知らぬ弟をつき飛ばすやら親たちの氣まで靜まる時なく之が爲めに一家のあらそひを起すかなしさ。如何なる前世の報にやかゝる例少き病にかゝり神や佛に祈れども親の誠のとゞかぬかその甲斐なさに泣く〳〵も月日を送り居れどもとてもいえぬ病ならば夫や妾のなきあとにていかになり行くらむと思ひめぐらせば不敏さいや増ばかりなり。むしろ親子身をふち川に沈めて共々に世の憂目をのがれむかとおもひ出すとも幾度ぞやされど子供に罪はなしあぢきなきは之を生にしわが身のみとおもへど三人の子の愛に引かされて切るにき

られぬ玉の緒もたゆるばかりのくるしさは何に譬へむよしもなし。もし〇〇子の年頃になりもせば万が一にも癒えもやせむとそればかりをちから草頼むは神よ佛よとその日を過ぐる母のこゝろには〇〇子はあたかも春のやさしき蝶に剌ある如し。

浮世とは誰れもこゝろにさとれども
わが憂きとは知る人もなし

和歌

故郷柳　池袋清風

ふるさとのあれし野中の柳かげつばめも飛ずなりにける哉

橋上霞

鏡山ゆきのひかりは見えながらかすみわたれる勢田の長橋

港霞

いかりおろす船笛さやに聞ゆ也ほのかにかすむ武庫の海原

野春月

長閑にも鈴菜さく野はくれそめてかすめる山に月出にけり

閑庭柳

さるさめの露の玉ぬく青柳のいとしづかなるにはのおもかな

春の歌の中に

蜜蜂のうなる羽音にさそはれてすゞなさく野にねぶりてし哉

故郷燕

すみ棄て戸さしがちなる古里のあるじや軒のつばめなるらむ

松山女學校の十年紀會を祝ひて　花園女史

咲く花のいく十かへりを松かげに
たがなでしこもにほひそふらん

正誤

本誌二月二十五日發行第四百三十六號第二十八頁所載中島俊子女史の輓詩轉句の

誰識白梅玉樹底

とあるは

誰識白梅花樹底

の誤植に付き、爰に訂正す。
また四百三十七號琴の話中の大日本國風音樂會々頭高野氏の名の繁は茂の誤なり。

時文

Do Everything

By Frances E. Willard.

万國婦人矯風會々頭フランセス、イー、ウイラード女史が、最近の著書をDo Everythingと云ふ、同會世界巡回遊說員等に捧呈する處のものなり。クラ、、パリッシュ孃其一部を我社に寄す。就て之を見るに、一小冊子中に、婦人矯風會の起原、運動の歷史、現今の事業等を畧述するものにして、ウイラード女史が英國なるソモルセット夫人の居城、イーストノア城中に在りて著述せしものなり。なほ本書に就きての委しき事は通讀を了へたる上にて云ふべし。

◎養雞實驗錄　小川休著　有隣堂發兌

著者小川氏は武州玉川の頭に良桑の葉を摘むの傍ら養雞に從事する爰に年あり、自ら一種良好の種雞を製造して、之を飼養し、斯業に於ける實驗に富めるものなるが、頃日後學の爲、其實驗の一端を錄したる一小册子を著し、名けて、養雞實驗錄といふ。在り來りの家禽飼養者類の寧ろ高尙に失して、學理に馳せたるとは異なり、平易簡畧に其經驗談を記述したれば、養雞業に志しあるもの、、之を參照するに於ては、尠からぬ補助を受けん。

◎天製絲瓜の水　幸堂得知作　博文館版

滑稽小說の第六編にして、緣日植木屋の梅吉が、月界に上りて、天女の爲に絲瓜の水を製造する傍、天界の諸殿を見物するを夢みてより銀座の眞中に天製絲瓜の水を賣出して繁昌したりといふ、一の滑稽譚、幸堂丈けに輕いものなり。去かしこれたゞ一篇の落語たるのみ。附錄の『淸朝二十卑怯』には日淸戰爭中淸兵怯懦の有様の一口話を二十寄せたるもの、餘の附錄も又何れも作者得意の滑稽を盡くせり。

◎北條早雲　澁柿園作　春陽堂版

これ昨年中東京日々新聞紙上に連載されたるものにして、題目の旣に明示せるが如くに、伊勢新九郎早雲宗瑞が、志を關八州の野に伸ぶるの立身事蹟の歷史小說なり。應仁以降天下麻の如くに亂れ、少しく志を抱くの士、各一方に割據して圖南の鵬翼を張らんとを欲せり。正に是れ英雄功を立つるの秋、中に伊勢新九郎は同志六人と室町の都を辭して、功業成るべきの場を求む。澁柿園は筆を、彼等七人が伊勢神廟の前に露宿通夜するの景より起して、新九郎、姉婿今川義忠の遺孤の爲に、其父の仇を復し、其國を安んじ、北條御所政知に仕ふるや、茶々丸の死を救ひ、茶々丸却つて其父政知を弑して、謀叛するや、兵を起して之を討ち、終に北條によりて、威を八州に振ふに、筆を投ぜり。描く處賢婦あり、佞人あり、驕婦あり、庸君あり、頑兒あり、忠臣あり、全篇六十余回、光榮奇變に富み讀者をして、頗る興味を感ぜしむるに足る。澁柿園の作中にては傑出のものにて、近頃の歷史小說中にても、先つ上乘のものなり。

◎笠の露　饗庭篁村作　春陽堂版

昔武州桶州在の常右衞門なるものが、暴風の夜に、何故とも知れぬに變死し、カスリ疵一ツ死骸にはなけれども、其處等に落ち散れる怪しの笠を證據に、母と娘とにて、小刀一本持たで敵討に出掛け、四國順禮となり京大坂彷徨ふ事一年、再び元の在所に歸りて、後また順禮に出掛けしが、江戶にて計らず、同じ村の藪醫淡泊と邂逅し、此者はもしや敵と思ふて、其者の家に泊りしより、彼が惡計にのせられ、金につまりて、母子は順禮をやめ、分れ〳〵に下女奉公に住み込みしが、娘の住み込みし酒屋の主人が、彼怪しの笠の主と知れ、仇討を思ひしに、却て仇でなくて、常右衞門がもとの友人と分り、奇緣を主人の弟と結んで、娘の戀も遂げ、惡人遂に衰え、偖て母子や、酒屋の家に禍ひせし惡者共は皆滅びたり。篁村の筆致輕妙は云ふまでなく、滑稽人の頤を解かしむるもの多しと雖も、こは却て、全篇をして殆どとりとめ、まとまりがなきものとなし、また悲哀とか、苦境とかいふ情の籠ることを乏しきを致せり。されど篁村の長所が即ち欠點となりたるもの此作者には詮方なきことか。

◎新小説第二巻第三號　春陽堂版

新小説第二卷第三號載する處の小説三種あり、即ち麗水の『名馬小輝』美妙の『好義人』と櫻痴の『出雲お國』是なり

『名馬小輝』の筋は、奥州健兒の愛馬が、我戀人の兄の持馬と祭の競馬に競爭して勝ちを制せしが、此小輝なる名馬後ちに近衛師團に買ひ上げになりしが、其元の持主なる少年、年長じて、騎兵聯隊に入りしに、端なく己の乘馬は、曩日の愛馬なりけるが、後日英閑に戰爭破裂するの時、彼健兒は愛馬に策じて、万里の遠征に上れり。然るに戀人が臨終の手帶に接したる翌日、敵中に奮戰して死すてふことなり。趣搆極めて不自然に、折合が附き居られば、面白く讀まれず。此篇新小説中にても最も不出來の作なり。

美妙の『好義人』は、英照皇太后陛下の大喪によりて、特赦せられし一老囚徒が京都大宮御所の門前の大地に端坐して御所伏し拜めるを見咎めたる、電燈技手が面白半分に其事蹟を尋ねたるに、この老人は昔主人の爲めに、義仇人を殺したるものにして、其主人といふは、此技手の父姉なりしといふもの語り。一篇の小話に過ぎざれども美妙の筆は、よく此好義人を描き出したりといふべし。

『出雲お國』は櫻痴が例の圓熟なる老筆を以て、歌舞伎お國の來歴を寫すもの、頗る讀むべし、たゞし未だ完結に至らず。

此號卷頭挿む處のコロタイプ口繪の意匠活人畫、甚だ美麗なれども、またいや味あり。福澤先生の肖像二面ゆかしく、馬琴、京傳、一九、三馬、種彦の肖像は、此等によりて故人の人となりを想起せしむるに足れり。

この花◎阿新丸の二書未讀

◎女學文壇雜俎

三月上中旬

◎女學生に望む續(勝浦鞆雄)
◎英米女子高等教育の概畧(中島力造)
◎英國女皇陛下
◎學生々徒健康上の状況(寺田勇吉)
◎女子教育論
◎女子教育振起策(成瀬仁藏氏演説大意)

女鑑第百二十八號
私立兵庫縣教育會雜誌第九十號
國民の友第三百三十九號
教育界第二號
教育報知第四百二十八號
日刊世界の日本三月十六日

片々

◎教育時論　其近刊號に於て女子教育論を唱ふ其論の要旨には、女子の天職は内を守るにあれば、之を盡くすに最も適當なる素養を與ふべき目的を以て、施す處の女子教育は、眞の女子教育なり。清少納言、江馬細香の如き女流は一般女子教育の理想とすべからずといひ、また女子は國家彝倫の保護者なり、世界絶美の彝倫國たる我國の女子を教育するにローマ遺産法によりて、破壞せられたる家族の生活を營む國の女子教育に摸倣せんとするが如きは、惑も亦甚し。また心情の智情たるべき女子の教育の彼女子過剩女勢過重國に行はるゝ、知力偏重教育に盲倣せんとするの弊、倘存するは、教育家の猛省を乞はんとするものなり、然れども女子高等專門教育は自ら別問題に屬すといへり。

◎同雜誌　の同號はまた別項に於て羅馬、獨乙の教育史は女子教育の國運消長に大關係あることを憂ふ。我國の教育家は今數層眞摯の同情を女子教育に向けざるべからずと叫びつゝ、又堂々たる大日本帝國、一の女子高等專門學校なきは、教育の系統を得たるものなりやと呼ぶ。實に天下の大勢は女子高等教育の必要を認識し來りつゝあるなり。

◎成瀬仁藏氏曰く　我邦の女子教育を振起するに三策あり、其一は教育者自ら奮勵することに在り、第二は方針を確定することに在り、第三は高等教育を施すことに在りと。

◎新學年來らんとす　諸學校は四月よりの新學年を迎へんとして、卒業式、入學生募集等に忙はし。而して吾人は新學年の、特に諸女學校の進歩盛大に一段落を生すべきことを、今日社會の大勢によりて卜知す。

◎世界の二最大事業者　を誰とかなす。一はステッドの尊めて世界無冠の女王と稱へたる万國婦人矯風會々頭ウイラード其人なり。他は現今に在りて最もよく赤十字社の主義精神を抱持して、正にナイチンゲールの後繼者たるクラゝ、バートン其人なり。彼等二人なるものは、其仁愛平和の主義を押し立てゝ、世界人類の平和聯合の大方針の爲めに運動しつゝあるなり。彼等は實に方今世界の二最大事業者なり。米國の此二女史を產みたるは千載の誇なり。

◎ウーラード女史　曾てパリッシュ女史に寄せて曰く、われ日本に赴かんことを欲するの念切、希くば此の事を日本國の姉妹に告げよと、蓋し女史は、ソモルセッ

ト夫人と、其ポリゴルト、ペチシロンと稱する婦風上の大請願書を我朝廷に建白せんとするものなり。

◎女權驚く　米國の一婦人が上院議員たらんと欲して運動するよしを聞きて、驚くべきの一怪報となして、喋々の議論をなす。吾人は其驚のあまりに甚しきを怪まんとす。

◎女子を進物　聞く所によれば清國にては、女子の賣買廣く行はれ居る由にて、貧窮者の女子にして十二歳より十五六歳に至れば、恰かも物品の如くに賣り放つ由なるが、貴族にして富有なるものは幾人となく之を買置き、其長ずるを待ちて眉目艶麗なるものを留めて、妾となし、其他を友人知己等に進物として贈ることありといふ。其價格の如きは美醜によりて異なれど需要の少なきためにや、歳末は最も廉價なり、殊に大飢饉ありたる時の如きは、一圓につき二人程に下落せりとぞ

(日刊世界の日本)

◎明治女學史の二、三月　明治八年二月二日文部省女子師範學校を東京に創建す●明治六年三月十四日外國人との婚嫁を許す●明治八年三月二十日婦女の犯罪に捧鎖を用ふるを禁ず●明治二十三年三月廿四日女子高等師範學校設置の旨を公布せらる。

◎取消　本誌前號の本欄内に記したる『某閨秀小説家逝いて後云々』の一項は、都合により、其全文を取消す。

時報

◎女子高等師範學校の家事專修科新設

日下尋常師範學校女子部及高等女學校に於ける家事科教員の適當なる者、甚缺乏に付、今般女子高等師範學校に於て、家事專修科なるものを設け、生徒三十名を募集して、授業を開始し、卒業の上は尋常師範學校及高等女學校家事科の教員たらしむべき見込なりと云ふ。而して該科の修業年限は二箇年にして、學科は家事の外、倫理、教育、國語、圖畫、體操とし、生徒は品行方正、身体健全にして、修業年限六ヶ年の高等女學校卒業生、尋常師範學校女子部二箇年の課程を終へたる者、若くは之と同等の學力を有する志願者より、試驗の上入學せしむ。試驗科目は體格、國語、數學、家事、歷史、地理、理科にして、尋常師範學校女子部及修業年限六ヶ年、若くは同程度以上の公立高等女學校卒業生にして、當該學校長より、品行方正、學力優等の保證あるものは、體格檢査及國語、數學、家事の三科目の外、學科試驗を行はず。學資は自辨にして、通學なるも、授業料は之を徵收せず。書籍器械の如きは、同校に於て差支なき限りは、可成貸與することとなり。

◎日本女子大學校設立運動

大坂梅花女學校々長成瀬仁藏氏は、數年來一の女子大學を大坂に起さんとするの計畫あり、大和の豪商土倉庄三郎氏大に之を賛助し、更に伊藤侯爵夫人、大隈伯爵夫人、松方伯爵夫人、大山侯爵夫人、岩崎男爵夫人等二十九人を發起人として近日いよ〳〵設立運動を發表すといふ。なほ又運動の一方針として、本月二十五日、同發起人等は貴衆兩院議員一同を帝國ホテルに招待して同大學設立の主旨を告げ、席上近衛公、鳩山議長其他數氏の女子教育に關する演説あるべしといふ。

◎瀧の川學園(舊稱孤女學院)慈善市

兼て預報したる瀧の川學園(舊孤女學院)慈善市は、いよ〳〵來四月一日より五日間、上野公園博覽會跡第五號館に於て開設せらるゝこととなれり。

◎貞婦賞を受く　香川縣山田郡前田村蓮井吉太郎の妻うたは貞實の廉を以て、今度德久同縣知事より左の如く行賞されたり、

山田郡前田村蓮井吉太郎妻

小野うた

夫の長病に家產を蕩し他に倚る可き所なし晝は幼女を携へ近村に菓物を賣り僅に藥餌の料を得夜は枕頭に侍して慰藉拜撫益看護の道を勵み又長子を分娩し菓物の利益急需を充すに足らざれば孩兒を懷にして祁寒酷熱風雨を云はず日々籃を擔ひて遠く庵治志度高松等に魚類を行商し醫藥餌養の資のみならず一家數口の生計を立て堅志力行十有餘年一日の如く其貞節洵に衆庶の模範とす依て其賞として金五圓下賜す

(都新聞)

◎瀧の川學園に餅を寄附す　豐多摩郡野方村元蹟の宮横山豐次郎同釘藏二名は瀧の川學園の美擧に感じ、先づ自ら進んで餅百箇澤庵五樽を同院に寄附せし所之に應じて同村中其日暮しの者に至るまで餅三箇或は五箇と思ひ〳〵に爭ふて相應の寄附を爲したる總計四百二十二箇に達したりといふ。

◎東京女學館　虎の門内なる同館は新條約實施の曉婦女子と雖も大に其必要を感

すべき英語にも熟せしめ、傍ら西洋の交際法をも心得置かしめんとの趣意より、本邦婦人の外數名の英國婦人を聘して、專ら教授に從事せしめ、高等女學科、高等專門科、撰科、特別科、裁縫專修科等の諸科を設け、正科の外には挿花、編物、刺繡等　手藝を設け和洋の割烹をも實習せしむる由にて、此程新規入學生徒募集中。

◎山陽女學校の現況　同校には目下生徒六十餘名あり、教員は十三名（囑託教員共）にて課業は豫備科（高等小學三年以上の者）、普通科（高等小學卒業以上の者）、手藝科、英語科等とし、手藝科には茶の湯活花等本人の希望により教授し豫備及普通科生には英語を兼修する事を得せしめ、裁縫は毎週五時間宛教授し、英語科手藝科にも德育と訓育とを施し、別に隨意科なる者を設け、本人の希望により選科として、編類、袋類、摘細工、切揷、押繪類、編物、絹絲細工、造花、茶の湯、生花、音樂、讀書、算術、作文、習字家政學等の内何にても其一を教授す。土曜日には割烹法を教授し、授業料は豫備普通英語手藝科外選科として、一種類毎に十五錢以上壹圓貳拾錢迄を要するよし。

◎松山女學校設立十年期紀念會　愛媛縣松山女學校は、二宮邦次郎氏の設立にかゝり、吉田清太郎氏（本誌閲讀欄中に見えたる篤志家）現に是が教頭たり。同校は設立以來本年にて十年に滿つるよしにて、本月二十五日之が紀念祝會を催し、同時に第四回卒業式を執行するよし。又同廿五日より廿七日までの三日間生徒學藝品展覽會開設の筈にて、各府縣女學校へも、參考品の出品を請ひたりといふ。

◎熊本婦人實業會の免狀授與式　熊本市なる婦人實業會は去る三月九日、其卒業生免狀授與式を執行したり。其卒業生は（本科卒業生）高田鐡猪、津野寅、島本案猪、土居さい、川谷瞰、岡林久尾、吉本千鶴、（隨意科卒業生）橋田寅猪、（溫習科卒業生）安田鳳、前田金猪、武石豐の十一人なりといふ。

◎鳥取市高等女學校の創立計畫　鳥取縣鳥取市會にては同市の女子教育を高尚にせんが爲め、高等女學校の設置を必要とし、之に關する經費支出を大多數にて議決したり。

◎磐城國中村町の子守教育　磐城國中村尋常小學校訓導田村クニ子は、同地に子守教育の設備はらざるを嘆じ同校長と議り校内に一の子守學校を設け、毎日終業後二時間づゝ最も親切に殊に賞者には石筆墨紙などを與へて、六十名近き子守を集め修身讀書算術等の教授を爲し、子守の品行日增に修まるのみならず、學術も亦進歩するより父母の喜び一方ならずと。

◎京都婦人慈善會　は本月十三日午後、京都府立高等女學校に於て、本年の初會を開きたるが、出席の婦人令孃等六十餘名にて、來る四月上旬に會員一同泉涌寺靈明殿の英照皇太后御靈前に參拜し終りて、妙法院の宸殿に於ては法要を執行し奉る事を決し、講師加藤里路、香川保晃兩氏の講話ありて散會せり。

（大坂每日新聞）

◎長野婦人懇話會　同會は三月七日南長野小學支校内に開き出席者五十餘名醫高島菜氏の嬰兒の身体及び頭腦發育の有樣並に其保護法に關する講話あり其他種々の餘興ありしといふ。

◎成瀨仁藏氏の演說　別項にいへる女子大學設立主唱者成瀨仁藏氏は、本月十三日午後二時より、帝國教育會例會に於て女子教育振起策の一端を演說したり。

◎クラ、バートン女史　米國赤十字運動の主唱者クラ、バートン女史は此程西班牙政府の許可を得て、キユーバ島の病傷兵士人民救濟の爲に將に出發せんとすとの報は、二月二十二日のユニオン、シグナルに見えたる處にして未だ女史は最早キユーバ島を渡りしや否やの詳報に接せず。バートン女史は本年六十七歳の高齡を以てして、慈善情愛の志、常に熱烈なるが爲に、曩にはアルメニア人氏救濟の爲め、遠く東歐の地を踏み今また此擧あり。其壯烈義心、聞く人をして奮起せしむるに足る。

◎社　告

一、今や正に學事上の新學年は來らんとして、各府縣の諸種女學校共に、多數の新卒業生を得たることとなるべきに就ては、此際本誌は、其卒業式日、卒業生人名等、遺漏なき樣揭載せん爲、諸方の通信を俟つ。

一、又何處の女學校共に新入生募集あるべきの際なれば、其校の現況槪畧通信あらば、本誌は喜んで之を揭載して、其學校及入學志願者双方の便利を圖るべし。

一、各地方女學界の時々其況に就きて有志の通信を望む。

瀧の川學園慈善市廣告

拜啓然れば大須賀亮一氏の設立に係る瀧之川學園（孤女學院改稱）の狀況は昨明治二十九年十一月下旬その一斑を記して世の慈善家諸君に訴へ候處之を見之を聞く人々皆感歎の外無く斯迄に神聖なる事業のわが國に設立せられ在るかとて忽數多の同情者を得申候

仍て新年になり候はゞ速に四方に告げて慈善會を擧行せむと思ひ居候處端なくも　大喪に遭遇致し恐懼謹愼今日に至り候然るに畏き　英照皇太后の御資性極めて御慈善に渡らせられし御事皆人の熟知し奉る所に候へば目下靜肅に嚴格に眞實慈善を心とせらるゝ人と共に此の會を擧行せむことを在天の尊靈も蓋し御嘉尙あらせらるべき歟と存じ候に付來四月一日より五日の間上野公園元博覽會五號館内にて擧行致す事に決し申候

恰も好し同園内に開設中なる明治美術會及日本繪畫會は深く此の擧を賛し本會入場劵を所持する人に限り右兩會の通劵を要せずして縱覽せしむべき旨を許諾せられたれば來會者は高雅の餘興を享受せらるべき事と存じ候

本會を賛成助力致すべき旨を今日迄に許諾相成候方々

（姓名イロハ順）

岩倉公爵夫人　久子殿
岩崎男爵夫人　寧子殿
石黒夫人　すま子殿
今村夫人　やす子殿
ロイド夫人　殿
蜂須賀侯爵夫人　隨子殿
坂夫人　若栄殿
濱尾夫人　作子殿
原夫人　富子殿
鳩山夫人　春子殿
波多野夫人　濱子殿
花房男爵夫人　千鶴子殿
仁禮子爵夫人　春賀子殿

西川夫人　殿
細川夫人　政子殿
穂積夫人　まつ子殿
本多夫人　貞子殿
穂積夫人　歌子殿
フルベック令孃　殿
チング夫人　殿
大村伯爵夫人　憲子殿
大隈伯爵夫人　綾子殿
大山侯爵夫人　捨松殿
大久保　芳子殿

押川夫人　つれ子殿
渡邊子爵夫人　いく子殿
渡邊男爵夫人　千施子殿
樺山伯爵夫人　登波子殿
河村伯爵夫人　春子殿
樺山夫人　常子殿
金子夫人　[illegible]子殿
嘉納夫人　すま子殿
カルチナー夫人　フロレンス殿
勝伯爵夫人　民子殿
河鰭子爵夫人　久子殿
梶夫人　くら殿
吉井夫人　寵子殿
吉田夫人　ろく子殿
高島子爵夫人　春子殿
高山　益子殿
武田夫人　錦子殿
武田夫人　貢子殿
園田夫人　惠子殿
津田　梅子殿
長岡子爵夫人　智久子殿
村田　梅ケ枝殿
ムーンター令孃　アンー殿
鵜飼夫人　信子殿
瓜生夫人　繁子殿
野口　ゆか子殿
黒田侯爵夫人　清子殿
久保夫人　初子殿
山脇夫人　房子殿
松方伯爵夫人　政子殿
松方夫人　保子殿

松方夫人　繁子殿
松野夫人　くら子殿
牧野夫人　峯子殿
マキム夫人　殿
マッツレット令孃　殿
藤井夫人　やそ子殿
ブリンクレー夫人　殿
フランシス夫人　殿
近衞公爵夫人　貞子殿
五島夫人　千代鶴殿
コンデル夫人　殿
秋月夫人　園子殿
阿部夫人　優子殿
鹽田夫人　みさ子殿
西鄕侯爵夫人　清子殿
齋藤夫人　春子殿
三ノ宮男爵夫人　八重野殿
佐口　美都子殿
木戸侯爵夫人　壽榮子殿
三井男爵夫人　苞子殿
水野夫人　ます子殿
宮下夫人　作子殿
御園　濱子殿
三好夫人　すゞ子殿
三崎夫人　菊榮殿
下田　歌子殿
廣澤伯爵夫人　千代子殿
森島　峯子殿
關根夫人　殿
[illegible]夫人　きみ子殿
鈴木　歌子殿

尙この上にも多數の御賛成被下候樣御勸誘御助力給はりたく奉願候かしこ

明治三十年三月

主唱者

小鹿島筆子
添田秀子
吳久美子
小宮珠子
元良米子

福音叢誌　第十號

三月發行

發行所　東京牛込區仲の町　福音叢誌社

日本女子大學校報告

發起人（いろは順）

東京　侯爵夫人　伊藤梅子
仝　男爵夫人　岩崎早苗子
大阪　磯野小右衛門
東京　侯爵夫人　蜂須賀隨子
京都　濵岡章子
大阪　殿村平右衛門
大和　土倉壽子
東京　侯爵夫人　大山捨松子
仝　伯爵夫人　大隈綾子
仝　大倉徳子
大阪　成瀬仁藏
仝　内海千代子
京都　男爵夫人　山田清子
東京　伯爵夫人　松方政子
大阪　松本濵子
東京　公爵夫人　近衛貞子
仝　侯爵　西園寺公望
大阪　男爵夫人　北畠三枝子
東京　三井捨子
仝　澁澤兼子
仝　伯爵夫人　土方亀子
大阪　勳四等從六位　廣瀬宰平
仝　廣岡久右衛門
仝　廣岡淺子
兵庫　周布貞子
大阪　從五位　住友吉左衛門
東京　子爵夫人　高島春子
仝　原六郎夫人富子
仝　森村市左右門

贊助員（いろは順）

東京　從二位勳二等公爵　岩倉具定
仝　正二位大勳位侯爵　伊藤博文
仝　正三位伯爵　板垣退助
仝　從四位勳三等男爵　岩崎彌之助
仝　磯邊包義
大阪　大阪市參事會員　石川市兵衛
仝　石崎喜兵衛
京都　飯田新七
大阪　井上保次郎
東京　哲學博士　市原盛宏
大阪　逸身佐兵衛
仝　井上徳兵衛
仝　井上淺次郎
仝　池永新兵衛
大和　今村勤三
大阪　伊藤徳三
仝　五百井長平
越後　衆議院議員　市島謙吉
仝　石田友藏
仝　石田長次郎
神戸　池田貫兵衛
仝　市田左右太
仝　泉谷勘一
東京　正二位勳一等侯爵　蜂須賀茂韶
京都　濵岡光哲
攝津　花木甚左衛門
大阪　濵崎永三郎
仝　原彌兵衛
仝　濵中八三郎
越後　畠山恩藏
大阪　正七位　西村輔三
仝　西尾權右衛門
備前　星島謹一郎
東京　正二位勳一等侯爵　德大寺實則
大和　土倉庄三郎
大阪　外山脩造
仝　從五位　土居通夫
堺　島井駒吉
大阪　布井具之助
東京　從二位勳一等伯爵　大隈重信

東京　大倉喜八郎
大阪　岡橋治助
堺　市長　大西五一郎
越後　衆議院議員　大竹貫一
大阪　岡崎榮次郎
仝　小倉幸
尼崎　大塚茂十郎
京都　大澤善助
攝津　若林與兵衛
仝　若林與左衛門
越後　渡邊腆
仝　渡邊幸平
攝津　若井源左衛門
仝　鷲尾久太郎
大阪　和田半兵衛
仝　和井田佐七
仝　和田清兵衛
仝　川上左七郎
仝　從七位　片岡直溫
仝　金澤仁作
仝　川上利助
仝　門田利助
仝　亀岡徳太郎
仝　金澤仁兵衛
仝　葛野調七
仝　片山和助
御影　嘉納治郎右衛門
新潟　鍵富三作
東京　加藤勝彌
兵庫　柏木庄兵衛
京都　法學博士　吉田作彌
大阪　吉原善右衛門
東京　吉村鐵之助
新潟　横山太平
京都　吉田直次郎
東京　子爵夫人　田中伊與子
大阪　衆議院議員　田中市兵衛
京都　田中源太郎
大阪　田村太兵衛
仝　田邊貞吉
仝　勳五等　田中太七郎
仝　從五位　玉手弘通
東京　衆議院議員　高田早苗
新潟　常置委員　田村寛一郎
越後　玉江貞太郎
仝　玉木善作
大阪　玉置治郎三郎

奈良　田中平兵衛
大阪　大阪參事會員　田口謙吉
仝　高安道純
奈良　谷村辨造
仝　玉田金三郎
大阪　竹尾治右衛門
仝　谷村伊右衛門
兵庫　曾根外次郎
仝　曾根忠兵衛
仝　永見吉明
大阪　樟本俊吉
東京　正三位勳二等男爵　南部彊男
京都　京都府會議長　中村榮助
東京　文部省參事官　中川小十郎
大阪　永田仁助
仝　永井仙助
仝　名越愛助
仝　衆議院議員　村山龍平
仝　村上嘉兵衛
仝　從三位勳三等　內海忠勝
仝　衆議院議員　浮田桂造
仝　右近權右衛門
大和　衆議院議員　植田理太郎
越後　宇田川善藏
東京　從二位勳一等子爵　野村靖
大阪　野村利兵衛
東京　正四位勳三等　栗塚省吾
仝　貴族院議員　久保田讓
大阪　久原庄三郎
越後　衆議院議員　久保田右作
大阪　工學博士　桑原政
京都　從三位勳一等男爵　山田信道
大阪　山口吉郎兵衛
大津　藪田勘兵衛
攝津　山邑太左衛門
大阪　山口善五郎
新潟　八木朋直
橫濵　山ノ井清次郎
東京　正二位勳一等伯爵　松方正義
仝　從三位勳二等　前田正名

東京　大阪　全　全　全　攝津　大阪　全　新潟　大阪　全　全　東京　全　東京　伊丹　奈良　大阪　越後　攝津　大阪　全　全　兵庫　大阪　全　全　京都　越後　東京　全　大阪　全　全　新潟　越後　全　新潟　越後　大阪　全　全

從七位　衆議院議員　法律博士　正五位　從三位公爵　正三位　大阪府會議員　京都日出新聞社長　正二位勳一等功二級侯爵　侯爵夫人　衆議院議員　縣會議員　常置委員　從三位勳二等男爵

益田孝　松木重太郎　前川楓造　松方幸次郎　俣野景孝　增井久太郎　松木龜太郎　增田信之　藤田傳三郎　藤田文治　藤本清兵衛　藤本清七　福本元之助　近衛篤麿　鴻池新十郎　兒島惟謙　小西新右衛門　小林駿藏　小泉清兵衛　小出淳太　近衛常三郎　阿部彥太郎　秋月高十郎　秋馬新三郎　有馬市太郎　寄木恒三郎　後井友太郎　洗木和一　雨森菊太郎　青柳正晉　西郷從道　西郷清子　佐伯勢一郎　阪本彰之助　阪上新次郎　齋藤喜十郎　佐々木松坪　佐藤伊助　阪口仁一郎　佐藤宗朗　鷲池平九郎　北畠治房　木原忠兵衛　木村靜龍

東京　全　大阪　全　越後　全　播中　東京　大阪　全　全　全　新潟　東京　全　大阪　全　全　越後　全　全　大阪　大阪　全　尼崎　奈良　神戸　新潟　全　神戸　東京

正三位勳二等　正五位男爵　縣會議員　從四位　從七位　法學士　正二位勳一等伯爵　從二位勳一等伯爵　正六位　大阪市會議長　正三位勳三等　新潟市長　縣會議長

三井八郎右衛門　三好退藏　三浦泰輔　水落義平　宮本利右衛門　三輪潤太郎　源川万吉　溝手保太郎　澁澤榮一　芝川又右衛門　志方勢七　澁川忠二郎　進藤嘉一郎　白瀬春三　土方久元　東久世通禧　平瀬龜之輔　廣岡信五郎　平賀義美　廣川長八　樋口次郎三郎　樋口時郎　弘世助三郎　森作太郎　本山彥一　木吹利一郎　調藤次郎　周布公平　鈴木長藏　鈴木長八　鈴木清　鈴木眞一

賛成員（いろは順）

東京　大阪　神戸　東京　新潟

女子高等師範學校教授　大阪工業學校長　兵庫縣尋常師範學校長　女學雜誌社長　新潟縣立病院長

飯盛挺造　伊藤新六郎　伊村則久　飯本善治　池原康造

東京　大阪手　東京　大阪　新潟　東京　兵庫　東京　京都　東京　東京　神戸　京都　東京　新潟　京都　兵庫　大和　全　大阪　東京　大阪　東京　大阪　東京　新潟　京都　奈良　大阪　東京　全　大阪　東京　新潟

正四位勳二等男爵　正四位勳三等造幣局長　衆議院議員　病院長　從三位勳一等　正五位　地方裁判所長　第三高等學校長　文學士　東北日報社員　京都府會議員　大阪尋常師範學校長　大阪高等學校長　大阪中學校長　女子高等師範學校教授　大阪毎日新聞社員　東京地方裁判所長　新聞社員　京都府高等女學校長　自由新聞主筆　奈良縣尋常師範學校長　大阪府書記官　從二位勳一等子爵　正五位　大阪毎日新聞社員　新聞社員　世界の日本主筆

橋本綱常　服部一三　長谷川爲治　波多野傳三郎　林寛治　長谷川俊太郎　鳩山春子　西澤房太郎　細川潤次郎　本庄太一郎　富田碩二郎　戸川安宅　千葉貞幹　折田彥市　大西祝　大桃相資　奥田繁三郎　岡田元太郎　奥田藤次郎　岡本德永　渡邊洵一郎　加納治五郎　金子銓太郎　加藤錦子　門田正經　加太邦憲　神林完爾　河原一郎　川島純幹　吉原三郎　田中不二麿　高橋健三　高木喜一郎　竹越與三郎　竹山屯

東京　東京　東京　全　全　全　東京　全　全　越後　大阪　大阪　京都　東京　東京　大阪　東京　東京　越後　大阪　東京　全　全　兵庫　東京　越後　全　全　東京　全　奈良　東京　全　兵庫　東京

東京日日新聞社員　從四位勳二等男爵　正三位勳二等　早稻田文學主筆　學農社　華族女學校教授　男爵　哲學博士　女子高等師範學校教授　中蒲原郡長　從七位　大阪朝日新聞社員　新潟新聞社員　京都府課長　法學士　女子高等師範學校教授　正五位勳五等學習院主事　音樂學校教授　女子高等師範學校教授　日本新聞社長　南魚沼郡長　北魚沼郡長　東區長　北區長　南區長　法學士　南蒲原郡長　北魚沼郡長　南魚沼郡長　從四位勳三等　理學士　米國學士　尋常中學校長　兵庫縣參事官　正三位勳一等子爵

鳥居賴三　園田安賢　辻新次　坪内雄藏　津田仙　津田梅子　中島信行　中島力造　中川謙次郎　成瀬隆藏　並川一馬　棟居喜九馬　上野理一　上田正當　植村俊平　瓜生繁子　馬屋原次郎　上原六四郎　野口保興　陸實　黑田利成　安井健治　山口幸七　山口昌壽　山下幸雄　山田總明　安田正秀　山田八十八郎　山際操　牧野伸顯　眞木平一郎　正木直彥　松島剛　松村介石　馬淵銳太郎　福岡孝弟

（未完）

明治廿七年二月十四日內務省許可
明治三十年三月廿四日印刷
明治三十年三月廿五日發行

發行兼編輯者 東京市麴町區下六番町六番地 巖本善治
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 根岸高光
發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舍第一工場 (電話十九番)

明治廿五年三月十九日遞信省認可



明治廿五年三月十九日遞信省認可

